

長野県大町市埋蔵文化財包蔵地緊急発掘調査報告書

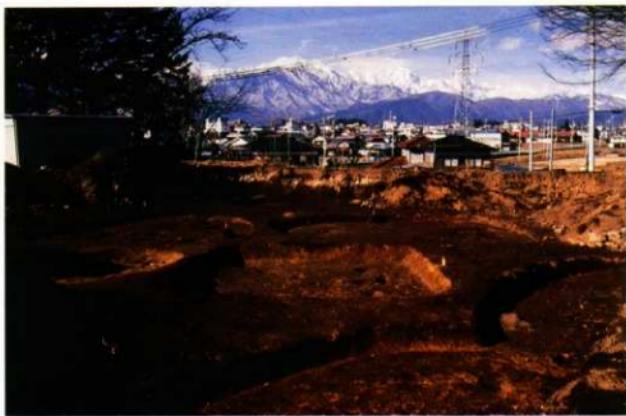
古 城

—松本平北部の弥生時代拠点集落跡の調査—

—中世仁科氏関係館跡の調査—

1 9 9 1

大町市教育委員会



III区北側全景



IV区土壘版築土層



4号住居跡炉



24号住居跡炉



6号住居跡南西隅土器出土状況



32号住居跡南西隅土器出土状況

長野県大町市埋蔵文化財包蔵地緊急発掘調査報告書

古 城

—松本平北部の弥生時代拠点集落跡の調査—
—中世仁科氏関係館跡の調査—

1991

大町市教育委員会

序

古城遺跡は、大町市街地の南西に形成する段丘上、社松崎地区の見晴らしの良い高台に立地する。今回の調査は送電用鉄塔建て替え工事に先立つ緊急発掘調査である。

調査は遺跡を部分的に4地区に分けて行われたが、予想をはるかに上回る数多くの遺構・遺物が発見された。なかでも注目を集めたのは、本遺跡においては、弥生時代後半の住居跡32軒が調査され、中世仁科氏関係館の一部である土塁・堀なども発見され、当地方における弥生時代集落の在り方、居館の在り方を探る上で極めて重要な新発見を与えることとなつた。

本報告書は極力、発掘調査結果の事実記載にとどめたものであるが、紙数等の制約から必ずしも意を尽くしきれなかった部分もあるのでご了承いただきたい。本書を弥生時代の研究ベースとして活用され、多くの方々によって研究が深められることを期待したい。

調査に関しては、この仕事に直接あたってくださった調査団長や先生方、さらに熱心に作業に身を投じてくださった作業員の皆さんの大なる御尽力によって当初の目的に達することができました。

この調査に当たり、調査団員の方々、作業員のみなさん、地主及び地元関係各位の大なる御尽力によって、このような成果を得られたことに重ねて感謝を申しあげ、ここに深甚なる敬意を表する次第であります。

平成3年3月

大町市教育委員会

教育長 矢 口 格

例　　言

1. 本書は、平成1・2年度に株式会社中部電力長野支店長と、大町市教育委員会教育長との契約に基づいて行われた、送電用鉄塔の建て替え事業に伴う、緊急発掘調査「古城遺跡」の報告書である。
2. 調査にあたっては、大町市教育委員会が組織した大町市埋蔵文化財調査団により実施された。
3. 本調査は、多くの学識経験者、市民、関係機関諸氏の協力からなったものである。
4. 調査結果については、調査団員で協議を重ねたが、時間的等の制約があり統一見解に至らなかった。基本的事項の統一はできる限り図ったが、表現方法等に多少の相違がある点は了解されたい。
5. 現場測量・整理作業と原稿執筆は関係者の協議により決定した。
 - 遺構測量は、荒沢進・島田哲男・清水隆寿・新井和男・臼井潤・横沢和子・北沢和子・牛越真由美が行い、一部微写真測図研究所に委託して、I区においては写真測図、III・IV区においては光波測量機を行い、多点測量を行い、測量データをコンピュータにより画像処理し、点を結線する測量方法を併用した。
 - 遺跡の地形・地質等については、森義直が行った。
 - 遺物整理作業は、島田・清水・臼井・横沢・北沢・牛越・金原隆子・中条幸美・小日向美香・富田みづ子が行い、遺物実測は清水が主に、島田・田多井用章が補ない行った。
 - 原稿執筆については、第Ⅰ章第1～3節が事務局で、第Ⅱ章第1節が森義直、第Ⅲ章第2節が清水、第Ⅳ章が篠崎健一郎の他は島田が行った。
 - 弥生時代の土器に関しては、松本市教育委員会の直井雅尚氏、長野市教育委員会の千野浩氏から、中世陶磁器については、諫長野県埋蔵文化財センターの市川隆之氏に御教示いただいたので記して感謝したい。
 - 遺構写真撮影は島田が主に、清水・臼井が一部行い、遺物写真撮影は臼井が主に行なった。
6. 方位は都市計画図（1：2,500）から求めた座標北を使用している。
7. 本書の編集は、全員協議のもと事務局で行ない、篠崎健一郎が総括した。
8. 本書関係の実測図・記録写真・遺物等は大町市教育委員会が保管している。なお、関係資料については、社松崎古城遺跡から略号化し、「M H J」と注記した。

本文目次

巻頭図版 1・2

序

例　言

第Ⅰ章　調査の経過	1
第1節　経過概要	1
第2節　調査体制	2
第3節　調査日誌	3
第4節　調査方法	4
第Ⅱ章　遺跡の立地と環境	7
第1節　立地と地形	7
第2節　周辺遺跡と古城遺跡の過去の調査	7
第Ⅲ章　遺構と遺物	12
第1節　遺構	12
第2節　遺物	43
第IV章　結　語	59
写真 1～40	

図 目 次

図1 古城遺跡発掘区割、位置図 (1:2500)	5
図2 古城遺跡(居館跡)位置、周辺小字図 (1:2500)	6
図3 土層柱状図	9
図4 社地区北部周辺の遺跡	10
図5 松本深志高校地歴会1971・92年度調査・遺構図 (1:200)	11
図6 I区全体図 (1:60)	13
図7 II区全体図 (1:60)	15
図8 III区全体図 (1) (1:60)	17
図9 III区全体図 (2) (1:60)	19
図10 III区全体図 (3) (1:60)	21
図11 III区全体図 (4) (1:60)	23
図12 III区遺構断面図 (1) (1:60)	25
図13 III区遺構断面図 (2) (1:60)	26
図14 III区遺構断面図 (3) (1:60)	27
図15 IV区全体図 (1:60)	29
図16 II区4号住居跡(上)、5号住居跡(新)(左下)遺物出土状況、5号住居跡(旧)(右下) (1:60)	31
図17 II区6号住居跡南西隅遺物出土状況(上・1:30)、12号住居跡(1:60)	32
図18 III区14・16・26号住居跡 (1:60)	33
図19 15・17号住居跡 (1:60)	34
図20 19号住居跡(上、1:30)・24号住居跡(下、1:60) 磚・遺物出土状況	35
図21 31号住居跡(上、1:60)、32号住居跡(中、1:60、下、1:30) 遺物出土状況	36
図22 33・34号住居跡 (1:60)	37
図23 弥生時代住居跡炉 (1) (1:20、4~6・12・14・15号住居跡)	38
図24 弥生時代住居跡炉 (2) (1:20、17~19・21・23号住居跡)	39
図25 弥生時代住居跡 (3)、ピット (1:20、24・28・31・32・34・5号住居跡P 5)	40
図26 土坑4(上)、土坑6(下) (1:30)	41
図27 IV区西側土壘土層断面図(上~中)、堀確認トレンチ土層断面図(下) (1:60)	42
図28 古城遺跡出土弥生時代後半土器模式図 (1:8)	44
図29 弥生時代中期前半・後期土器 (1) (6は1:3、それ以外は1:4)	47
図30 弥生時代後期土器 (2) (23~26・32~33は1:3、それ以外は1:4)	48
図31 弥生時代後期土器 (3) (41~48は1:3、それ以外は1:4)	49
図32 弥生時代後期土器 (4) (63は1:3、それ以外は1:4)	50
図33 弥生時代後期土器 (5) (1:4)	51

図34 弥生時代後期土器（6）（93・94・98・99・111は1:3、それ以外は1:4）	52
図35 弥生時代後期土器（7）（112～115は1:3、それ以外は1:4）	53
図36 弥生時代後期土器（8）（1:4）	54
図37 弥生時代後期土器（9）（143は1:3、それ以外は1:4）	55
図38 弥生時代後期土器（10）（1:4）	56
図39 弥生時代後期土器（11）（1:4）	57
図40 弥生時代後期土器（12）（176～180、1:4）、弥生時代後期鉄製品（181～183、1:2）、 古墳時代鉄製品（184、1:2）、中世土器・陶磁器（185～192、1:4）、中世鉄製品、 石製品（193～200、1:2）	58

写 真 目 次

- 卷頭図版 1 1. III区北側全景 2. IV区土壙板築土層 3. 4号住居跡炉
- 卷頭図版 2 1. 24号住居跡炉 2. 6号住居跡南西隅土器出土状況 3. 32号住居跡南西隅土器出土状況
- 写真 1 1. 遠景 2. 近景 3. 全景
- 写真 2 1. 近景 2. 近景 3. 近景
- 写真 3 1. I区全景 2. II区全景
- 写真 4 1. II区全景 2. III区北側全景 3. III区北側全景
- 写真 5 II区 1. 4号住居跡遺物出土状況 2. 4号住居跡鐵製的針等出土状況 3. 4号住居跡全景 5. 5号住居跡遺物出土状況
- 写真 6 II区 1. 5号住居跡土器出土状況 2. 5号住居跡P5 3. 5号住居跡(新)全景 4. 5号住居跡(旧)全景 5. 7号住居跡全景
- 写真 7 II区 1. 6号住居跡全景 2~4. 土器出土状況 5. 12号住居跡全景
- 写真 8 I区 1. 8号住居跡 2. 8号住居跡の削片集中 3. 9号住居跡土器出土状況
III区 4. 14号住居跡土器出土状況 5. 14号住居跡全景
- 写真 9 III区 1. 14号住居跡全景 2. 15号住居跡南半分検出状況 3. 15号住居跡全景
- 写真 10 III区 1. 15・33号住居跡 2. 炉周辺遺物出土状況 3. 炉上の壺出土状況 4. 炉南北西ピット内壺出土状況 5. 小型台付鉢、勾玉状石器出土状況 6. 16・26号住居跡全景
- 写真 11 III区 1. 16・26号住居跡全景 2. 16号住居跡土器出土状況 3. 26号住居跡土器出土状況 4. 17号住居跡
- 写真 12 III区 1. 17号住居跡 2~3. 18・35号住居跡 4~5. 18号住居跡土器出土状況
- 写真 13 III区 1. 18号住居跡南壁側 2~5. 21号住居跡疊・遺物出土状況
- 写真 14 III区 1~2. 21号住居跡炉上~西側にかけての集石 3. 19号住居跡 4. 19~20~23号住居跡
- 写真 15 III区 1. 19号住居跡 2. 23号住居跡 3. 22号住居跡・土坑1
- 写真 16 III区 1~3. 30号住居跡
- 写真 17 III区 1~3. 31号住居跡
- 写真 18 III区 1~4. 31号住居跡遺物出土状況 5. 32号住居跡遺物出土状況
- 写真 19 III区 1~3. 32号住居跡
- 写真 20 III区 1~4. 33号住居跡 5. 34号住居跡
- 写真 21 III区 1~4. 32号住居跡 5. 35号住居跡
- 写真 22 IV区 1~4. 24~25号住居跡遺物・疊出土状況
- 写真 23 IV区 1~2. 24~25号住居跡 3. 27~28号住居跡
- 写真 24 1~3. IV区27~28号住居跡 4. I区溝1(方形周溝墓?)
- 写真 25 住居跡・炉 1. 4号住居跡 2. 5号住居跡 3. 6号住居跡 4. 12号住居跡
5. 14号住居跡 6. 15号住居跡 7. 17号住居跡 8. 18号住居跡
- 写真 26 住居跡・炉 1. 19号住居跡 2. 21号住居跡 3. 23号住居跡新炉 4. 23号住居跡
旧炉 5. 24号住居跡 6. 31号住居跡 7. 32号住居跡 8. 34号住居跡
- 写真 27 I区古墳 1~2. 全景 3~4. 周溝内土器集中1
- 写真 28 1~6. I区古墳 1. 主体部と思われる土坑 2. 周溝内土器集中1 3. 周溝内土器集中2 4. 周溝内土器集中3 5. 周溝内土器集中4 6. 葦石状の礫の状態

7. IV区溝2、29号住居跡
- 写真29 1. IV区溝2、29号住居跡 2. III区土坑2 3. II区土坑6<土括墓> 4. IV区竪穴
1
- 写真30 1. IV区竪穴1 2・3. II区柱穴群1<中世>
- 写真31 1. IV区南西部分土壘土層 2. IV区西側土壘土層 3. III区北西部土壘土層
- 写真32 1. IV区南側の土壘南側に接して確認された堀 2. III区東側の現存する土壘 古城遺跡出
土遺物 3. 15号住居跡出土の勾玉状石製品 4. 弥生時代後期の鉄製品
5. 6号住居跡出土の石包丁
- 写真33 出土土器<弥生時代後期> 1. 4号住居跡 2～5. 5号住居跡 6～8. 6号住居跡
- 写真34 出土土器<弥生時代後期> 3. 5号住居跡 1・2. 4号住居跡 4. 9号住居跡
5. 7号住居跡 6・7. 14号住居跡 8・9. 15号住居跡
- 写真35 出土土器<弥生時代後期> 1・2. 15号住居跡 3. 16号住居跡 4～6. 17号住居跡
7～9. 18号住居跡 10. 19号住居跡
- 写真36 出土土器<弥生時代後期> 3. 15号住居跡 1. 19号住居跡 2・4～6. 21号住居跡
8～10. 24号住居跡
- 写真37 出土土器<弥生時代後期> 1. 24号住居跡 2・3・5. 27号住居跡 4. 26号住居跡
6. 28号住居跡 7・8. 30号住居跡 9. 31号住居跡
- 写真38 出土土器<弥生時代後期> 1～4. 31号住居跡 5～7. 32号住居跡 8・9. 34号住
居跡
- 写真39 出土土器<弥生時代後期> 1～3. 31号住居跡 4・5. 32号住居跡 6. 33号住居跡
7・8. 34号住居跡 9. 35号住居跡 <9は弥生時代中期前半の土器>
- 写真40 1. 第1次開始式 2. II区造構掘り下げ作業風景 3. I区クレーンによる写真測図風景
4. III区南側検出作業風景 5. IV区土壘下層調査グリッド掘り下げ作業風景
6. III区南側造構掘り下げ作業風景 7. III区北側造構掘り下げ作業風景 8. 作業員記念
写真

第Ⅰ章 調査の経過

第1節 経過概要

1. 調査に至るまでの経過

昭和62年4月、大町市大字社松崎地区で、中部電力株式会社長野支店が送電用鉄塔の立て替えを行う計画（送電線77kv池田大町連絡線新設工事）が持ち上がった。大町市教育委員会では、当地にある古城遺跡の保護について、中部電力と数次にわたり協議を実施してきたが、工事を平成元年度に実施することになったため、昭和63年6月14日、最終保護協議を実施し、市教委が主体となって緊急発掘調査を実施することを確認した。

市教委は、平成元年6月19日に中部電力と委託契約を結び調査準備を始め、6月26日から発掘作業を開始した。

2. 調査計画の変更とその後の経過

当初計画では、立て替え鉄塔1基と仮設鉄塔1基の約306m²について調査を行う予定であったが、調査途中で工事計画の変更があり、新たに仮設鉄塔1基約100m²と、工事に伴う周辺掘削個所450m²について調査が必要となった。このため、当時は元年度中に報告書の刊行まで終了する計画であったが、市教委が他に抱える発掘調査事業量を考えると、これら全地区を発掘したうえで報告書をまとめあげることは困難と思われたため、中部電力と協議し、元年度の工程は発掘作業を完了するまでとし、報告書作成作業については平成2年度に送ることとした。

変更内容は次のとおりである。

調査年度（事業内容）		事業費
変更前	平成元年度（発掘・整理・報告書刊行）	開発側負担額 1,243,210円
変更後	平成元年度（発掘・整理）	開発側負担額 2,884,000円
	平成2年度（整理・報告書刊行）	開発側負担額 1,545,000円

さらに、仮設鉄塔2基の調査を終了した段階で、予想を上回る遺構・遺物が出土したため、事業費の年度配分を次のとおり変更し対応することとした。

調査年度（事業内容）		事業費
変更前	平成元年度（発掘・整理）	開発側負担額 2,884,000円
	平成2年度（整理・報告書刊行）	開発側負担額 1,545,000円
変更後	平成元年度（発掘・整理）	開発側負担額 3,243,000円
		保護側負担額 753円
	平成2年度（整理・報告書刊行）	開発側負担額 1,131,000円
		保護側負担額 844円

発掘作業は12月25日に終了した。この間、雨天による中止を除くと54日間の発掘作業を実施している。発掘作業終了後は事務室において整理作業を進め、本報告に至った。

なお、平成2年度事業分の委託契約は、平成2年4月9日に交わしている。

第2節 調査体制

1. 調査体制

(1) 大町市教育委員会（文化財担当）

ア. 平成元年度

教育長 矢口 格 ／ 社会教育課長 降幡 忠 ／ 文化財係長兼課長補佐 降旗正光
 同係主事 新井和男・島田哲男 ／ 同係嘱託職員 白井 潤
 同係臨時職員 大和芳子・清水隆寿・横沢和子

イ. 平成2年度

教育長 矢口 格 ／ 社会教育課長 降幡 忠 ／ 文化財係長兼課長補佐 降旗正光
 同係主事 新井和男・島田哲男 ／ 同係主事補 清水隆寿 ／ 同係嘱託職員 白井 潤
 同係臨時職員 金原隆子・中條幸美・富田みづ子

(2) 大町市埋蔵文化財調査団（市教委が組織）

ア. 平成元年度

団長 鈴崎健一郎 ／ 副団長 原田 肇 ／ 調査主任 島田哲男
 調査員 荒井和比古・荒沢 進・白井 潤・清水隆寿・関 賢司・幅 具義・森 義直
 調査補助員 伊藤真治

イ. 平成2年度

団長 鈴崎健一郎 ／ 副団長 原田 肇 ／ 調査主任 島田哲男
 調査員 荒井和比古・荒沢 進・白井 潤・清水隆寿・関 賢司・幅 具義・森 義直

(3) 作業員

ア. 平成元年度（発掘作業）

青木富士太・飯島播幸・福沢光子・薄井志げ子・達藤充吉・上條光則・北沢栄子・北沢 茂・
 下川悦治・関 節子・関宗治郎・服部力夫・原山昭信・降旗 章・降旗くに子・降旗芳人・
 峰村道雄・横沢門

イ. 平成2年度（整理作業）

田多井用章

2. 調査協力者

調査にあたり、多くの方々からご指導・ご協力を賜りました。以下、ご芳名を記し、御礼に替えさせていただきます。（敬称略）

(2) 指導者・協力者

設楽博己／樋口界一／武藤雄六／百瀬長秀／市川隆之／石上周藏／市村勝己／野村一寿／竹内 稔／
 原 明芳／神沢昌二郎／直井雅尚／竹原 学／山田真一／山下泰永／小林康男／笹沢 浩／小林秀夫／
 森島 稔／岩崎卓也／神村 透／土屋 積／金井正三／青木和明／宮下健司／矢口忠良／矢島宏雄／
 佐藤信之／臼田武正／高村博文／田中正治郎／堤 隆／花岡 弘／青沼博之／桐原 健／関沢 啓／
 平林 彰／百瀬新治／山岸洋一／山田瑞穂／大沢 哲／会田 進／平出一治／守矢昌文／高見俊樹／
 五味一郎／小池 孝／小平和夫／宮城孝之／末木 健／前田清彦／石川日出志／寺崎裕助／川村浩司／

北村 亮／泉 拓良／石黒立人／秋山道生／橋本裕行／飯塚 誠／市沢英利／高橋龍三郎／中沢道彦／木村隆一／福島邦男／町田勝則／千野 浩／小山岳夫／青木一夫／新谷和孝／竹内靖長

(2) 地権者

荒井孝次・勝野弘道・高橋潤生・八丁はま子・降旗政登・降旗芳人

第3節 調査日誌(発掘作業のみ)

6月26日00 晴 時々晴 開始式。I区重機による表土除去。残土整埋、辺境検出。II区人手による表土除去。	11月7日00 晴 重機によりIII区表土除去。
6月27日00 曇一時雨 II区人手による表土除去、辺境検出。4～7号住を検出。	11月13日00 曙一時雨 測量基準設定。
6月28日00 雨 雨により作業中止。	11月20日00 曙時々晴 III区表土整理。辺境検出。14～20住検出。
6月29日00 曙時々晴 I区再度辺境検出。8・9住と古墳周溝を検出。一部掘り下げ。	11月21日00 曙時々晴 辺境検出。
6月30日00 曙時々晴 1区8・9住・古墳周溝掘り下げ。II区4・5住掘り下げ。	11月22日00 曙時々晴 14～20住掘り下げ。
7月1日00 曙のち晴 I区古墳一部掘り下げ、精査。8・9住床面精査。古墳構造状況の写真撮影。II区4・5住掘り下げ。中世と思われる穴六枚出。	11月23日00 曙 休み。
7月2日00 曙 I区古墳主体部・東側土層セクション作成。	11月24日00 曙時々晴 14～20住掘り下げ。
7月3日00 雨 のち晴 雨により作業中止。雨が止んだ合間に見てI・II区セクション作成。	11月25日00 曙時々晴 重機によりIV区表土除去。
7月4日00 曙 I区古墳精査。II区4・5住精査。6・7住掘り下げ。	11月26日00 曙一時晴 休み。
7月5日00 晴 I区古墳精査。II区4・5住精査。6～9住床面掘り下げ。	11月27日00 曙一時晴 休み。
7月6日00 晴 I区古墳精査。II区5～12住掘り下げ。	11月28日00 曙のち晴 休み。
7月7日00 曙 I区古墳精査。II区5～12住掘り下げ、精査。	11月29日00 曙時々晴 III区14～23住掘り下げ、精査。IV区表土整理。辺境検出。
7月8日00 曙 I区古墳精査。II区5～13住掘り下げ、精査。	11月30日00 曙一時晴 III区14～23住掘り下げ、精査。IV区辺境検出。
7月9日00 雨 休み。	12月1日00 曙一時晴 III区14～23住掘り下げ、精査。IV区辺境検出。南隣の砂礫層が土壌の積み上げ土であることが判る。24・25住検出。
7月10日00 曙時々晴 I区古墳精査。II区4～13住精査。	12月2日00 曙一時晴 III区14～23住掘り下げ、精査。
7月11日00 曙のち晴 I区古墳精査。II区4～13住精査。	12月3日00 休み。
7月12日00 雨 4住戸実測。	12月4日00 曙一時晴 III区14～23住掘り下げ、精査。18・21・22住検出。IV区24・25住掘り下げ。土足の掘り下げ。
7月13日00 雨 5住戸実測。	12月5日00 曙 III区14～23住精査。21住実測。
7月14日00 晴 I区古墳精査。II区4～13住精査。	12月6日00 曙 III区16住下に26住が見つかっており、精査。21住実測。
7月15日00 晴 土層調査。 I区古墳周溝内土器精査。	12月7日00 曙 III区コーディックによる測量。15住戸実測。14住実測。
7月16日00 雨 休み。	12月8日00 曙時々晴 III区コーディックによる測量。14住戸・17住戸・21住戸実測。IV区測量基準杭設置。
7月17日00 曙時々晴 II区5・6住精査。	12月9日00 雨時々晴 III区南側の純動的実測。コーディックの精査。
7月18日00 晴 I区午前中古墳及び周辺の滑落、午後写真測量。II区4～13住精査。	12月10日00 晴 休み。
7月19日00 晴 写真測量の撮影結果が出るまで休み。	12月11日00 晴 III区北側重機による表土除去。IV区24住実測。
7月20日00 晴 I区古墳遺物取り上げ。標示、除去。II区4～13住精査。	12月12日00 曙 辺境検出。測量基準杭設置。IV区24住実測。土足下掘り下げ。27・28住検出、掘り下げ。
7月21日00 晴 機材の片付け。II区5住床下精査。	12月13日00 曙一時晴 III区15・18・30～34住掘り下げ。IV区24住エレベーション測量。27・28住精査。
7月22日00 晴 戻りの実測完了。本日にて第1期調査終了。	12月14日00 曙一時晴 III区15・18・30～34住掘り下げ。IV区27・28住精査。午後雨により中止。
8月2日00 重機によりI区埋め戻し。	12月15日00 雨のち晴 III区コーディックによる測量。IV区15住戸石実測。
11月6日00 曙時々晴 本日より第2期調査開始。重機によりIII区表土除去。	

- 12月16日(火) 晴 Ⅲ区15・18・30～34住精査。33住実測。
 12月17日(水) 晴 休み。
 12月18日(木) 曇 Ⅲ区15・18・30～34住精査。IV区土堤土塁調査作成。
 12月19日(金) 曇 Ⅲ区15・18・30～34住床面精査。32住実測。32住伊実測。34住下層に35住検出、掘り下げ。
 12月20日(土) 曙 Ⅲ区15・18・30～34住床面精査。31住実測。31住伊実測。
 12月21日(木) 曙 Ⅲ区コーディックによる測量。31住実測、エレベー
 ション測量。IV区27住北側土塁下層検出、掘り下げ。
 12月22日(金) 晴 Ⅲ区コーディックによる測量。IV区27住北側・整穴南側精査、実測。
 12月23日(土) 曙のち晴 休み。
 12月24日(日) 曙のち曇 休み。
 12月25日(月) 曙 Ⅲ区重機による埋め戻し。IV区土壠調査作成。機材撤収。本日にて第2期調査終了。

第4節 調査方法

古城遺跡（居館跡）は、社・松崎の古城・南堀地籍を中心に広がる遺跡である。

今回の調査地は、鉄塔工事区ごと任意にI～IV区を設定し（仮設鉄塔2基の工事区をI区（81m²）とII区（100m²）、既存鉄塔除去工事に伴う掘削地をIII区（450m²）、既存の鉄塔建て替え地をIV区（225m²）。I区は南堀地籍、II・III区は古城地籍、IV区はヤキバ地籍にあたる）、工事区の範囲全面を調査対象とし、調査を実施した。

表土除去にあたっては、I・III・IV区では重機を使用し、II区では人力で行った。III区については、廃土置き場の関係から2回に分けて調査を行った。IV区においては、既存鉄塔が残っていたために、その部分を残し、撤去の際に立ち合い調査を行うこととし、その部分を除き調査した。また、IV区においては当初予想もしなかった土塁が地中に埋没して約半分の高さ（約2m）が残っており、調査深度がその部分だけ深くなり、土塁上部が砂礫層であり崩落の危険があること、南東隣には人家がありそれに対して崩落の危険等があることなど、当初は土塁が残っていることを予想しなかった結果から、崩落防止対策等や多量な廃土置き場が確保できず、部分的な調査となってしまった。このことからIV区においては、鉄塔撤去時に調査員が立ち合い、その脚部分だけを除去するようにし、また新鉄塔建設時にも撤去工事同様に調査員が立ち合い、極力、脚の基礎部分の掘削だけを行い鉄塔建設を進めることとした。IV区においては以上のようなことから未調査区が部分的ではあるが、鉄塔下に残り保存されている。

住居番号は、1971・72年の松本深志高校地図会の調査で1～3号住居跡の3軒の住居跡が検出されていることから、それに統けて4号住居跡からとした。

測量は、座標方眼・標高ベンチマーク（トラバース杭）を設定し使用した。座標・標高は、1988年度に実施した中城原遺跡の測量成果を基に御山光測査に委託して求め、I区ではT-2（X=+54732、488・Y=-56581、179・標高713,628m）、II区ではT-4（X=+54858、904・Y=-56627、086・標高715,910m）、III区ではT-6（X=54890、067・Y=-56603、666・標高715,666m）、IV区ではT-3（X=+54795、263・Y=-56602、861・標高716,327m）を設置し、使用した。測量作業はT-1～T-6より求めた点の杭に基いた簡易造り方測量及び平板測量と御写真測図研究所に委託し、I区ではクレーンによる写真測図、III・IV区では光波測量機を用い、多点測量を行い、測量データをコンピュータにより画像処理し、点を結線する測量を併用し進めた。

方位は座標化を使用した。

遺跡記号は、社松崎古城遺跡から略語化し、「MHJ」とし、遺物への注記もそれでおこなった。

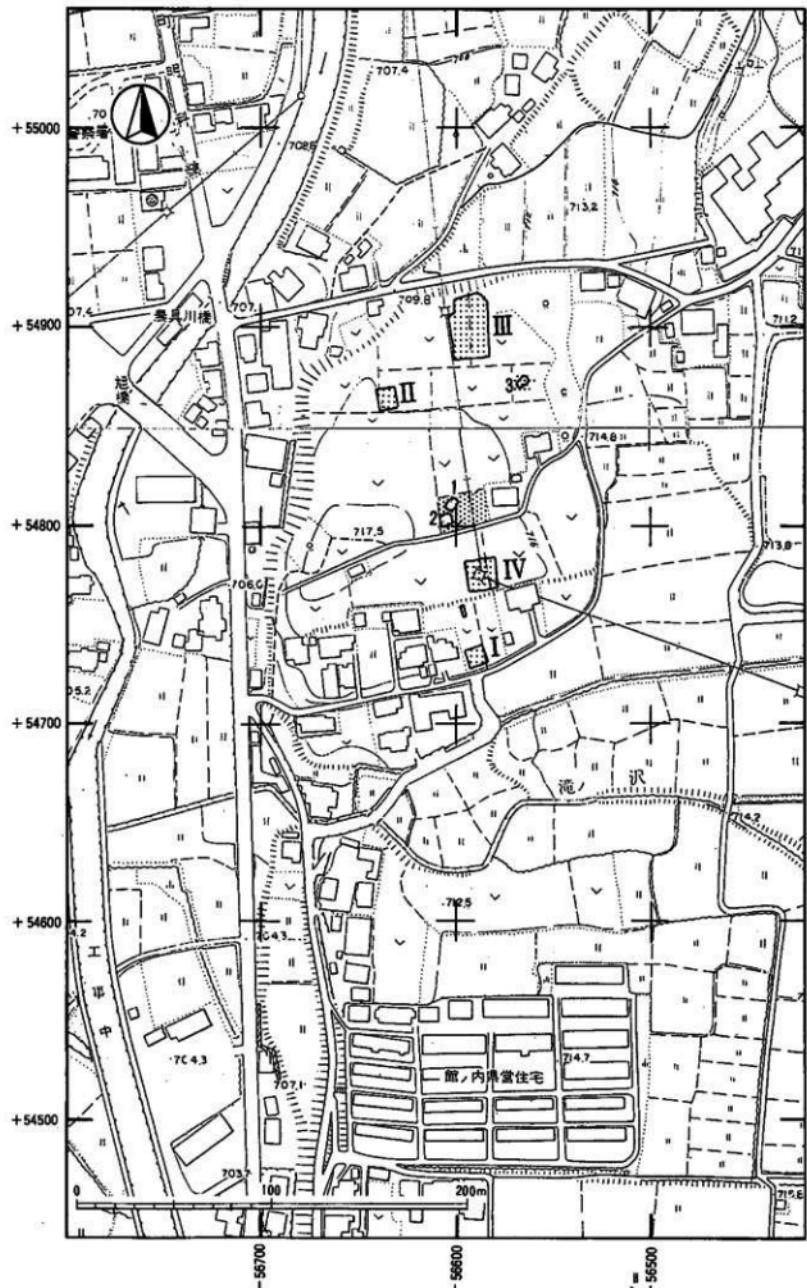


図1 古城遺跡発掘区割、位置図（1:2500）< I～IVのトーンが、1989年調査区。1～3の周辺トーンは、1971・72年松本深志高校調査区。1～3はその時に検出された住居番号。>

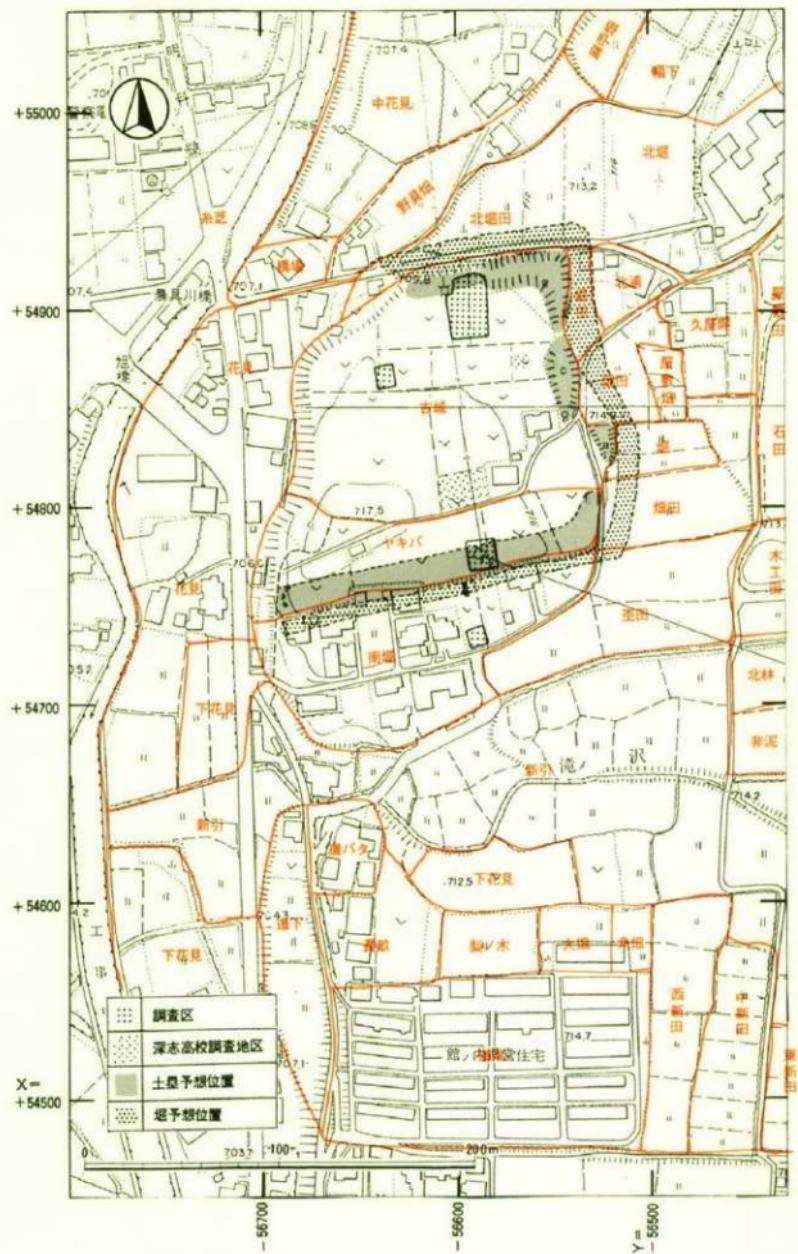


図2 古城遺跡（居館跡）位置、周辺小字図（1:2500）

第Ⅱ章 遺跡の立地と環境

第1節 立地と地形

1. 遺跡付近の立地と地形・地質

本遺跡は松本盆地の北部大町市社地区にあり、高瀬川によって形成された館の内段丘面の海拔715m付近にある。

この段丘の西は大町の平地が広がり、更にその西はフォッサマグマの西部山地である後立山連峰が南北に連なっている。遺跡の東側はフォッサマグマの堆積物である第三紀層と安山岩よりなる東部山地の低山帯が、遺跡との比高300m～400mでは南北に連なり、山麓で館の内段丘面と接している。遺跡から山麓までの距離は450mである。

2. 館の内段丘と遺跡

館の内段丘面と高瀬川の現河床との比高は15m～20mで、高瀬川に平行に南北に伸び、南に行く程低くなり池田町付近で消滅する。この段丘面は東部山地からの崩土や崖錐が押し出し、全体として緩かに西側に傾斜している。

この段丘堆積物は西部山地から高瀬川により運ばれた花崗岩や酸性火成岩類の砂礫が主体であり、最上部は東部山地より沢によって運ばれたロームと、第三系の風化物の混成によって生じた粘性の極めて大きい粘土層、細砂層、それに場所によっては、二次的のロームに起因する黒ボカ土などが数十cm～2m弱と東に厚く西に行く程薄く乗っている。段丘の堆積物中に1次堆積のロームが見られないことから、この段丘面の形成は沖積統によるものと言える。

発掘地点に限って観察すると、遺跡は段丘上の段丘崖東側に広がり、遺構面までの土層は土壌部分を除けば、全体的に浅く、約30～40cm程度ベースの黄褐色砂礫層に達する、水はけの良好な場所である。

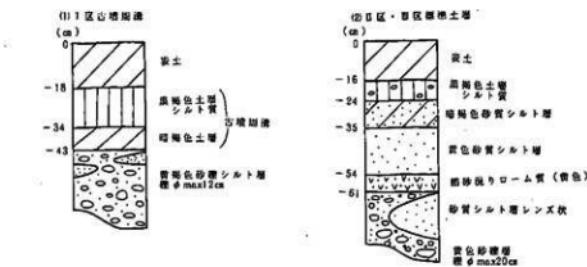
第2節 周辺遺跡と古城遺跡の過去の調査

社地区北部は、弥生時代～平安時代の遺跡、中世仁科氏関係の遺跡・居館が多く見られる。古城遺跡から北側の丑館遺跡、南側の館ノ内居館跡にかけては段丘上に続き、縄文時代後期～中世まで重複しており、特に弥生時代・古墳時代・平安時代後半、中世（鎌倉・室町時代）の遺物が多く見られ、同一存在したとも思えるようない連の大遺跡群として見られる。

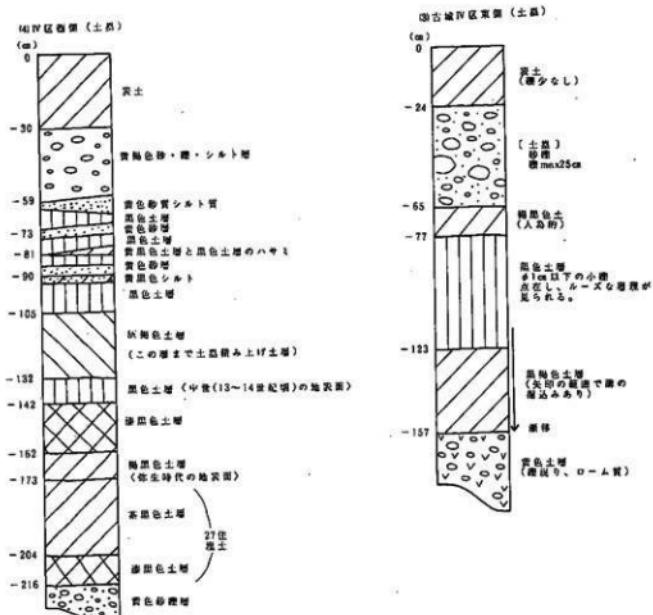
特に弥生時代では、淹ノ沢を隔て南側の対岸にある中城原（中条原）遺跡の館ノ内県営住宅の地点（道端地籍）において、1988年県営住宅建て替えに伴う調査で、弥生時代中期住居跡1軒・集落の環濠もしくは集落を区切る溝3本、弥生時代後期の方形ないしは円形周溝墓7基、木棺墓3基が発見された。この中で特に注目されるのは、周溝墓と木棺墓の存在で、調査地区内では、墓の他に弥生時代後期の遺構は見られないことから、弥生時代後期においては、淹ノ沢を挟んで古城遺跡側は住居集落域、中城原遺跡道端地籍側は墓域とした集落構造関係があったものと推定される。また、古墳時代中期においては、やはり中城原遺跡の1988年の調査で3基の古墳が検出されており、今回の本遺跡調査においても古墳時代中期の古墳が検出されたことから中城原遺跡から本遺跡にかけて古墳群が形成されていた可能性が高く、これを運営した集落は、まだ遺跡内容がはっきり

りとしていないが、段丘下の旭町遺跡あたりにある可能性が高いと思われる。

古城遺跡は過去においてから、弥生時代の遺物が多く出土することが知られており、1971・72年松本深志高校地歴会により2次に渡って調査が行なわれ(図5)、住居跡3軒と中世と思われる土坑、石組が検出されている(土坑は、調査の結果報告である「あぜみち」においては、住居の貯蔵穴とされているが、主柱穴がこの位置に1本あれば4本主柱となること、住居跡面積に比べて大きく、方形に近いことから中世の土坑が切り合ったものと予想される。ちなみにこの場所から刀子と思われる鉄製品が出土しており、弥生時代と報告されているが、中世の遺物と考えたい)。住居跡は、1号住居跡が石囲い埋甕炉をもつ4本主柱の梢円形、2号住居跡が、埋甕炉をもつ4本主柱の方形、3号住居跡が石囲い埋甕炉をもつ4本主柱の隅丸長方形である。1~3号住居跡とも弥生時代後半の住居跡で、遺物は実見していないが報告から見て、1号住居跡は、平均的な箱清水式期、2・3号住居跡は、箱清水式期の中でも新しい時期のものと考えられる。



〔ベースの黄色砂砾層の岩質は酸性火成岩が多く含まれる〕



〔ベースの黄色砂砾層の岩質は酸性火成岩が多く含まれる〕

図3 土層柱状図



図4 社地区北部周辺の遺跡

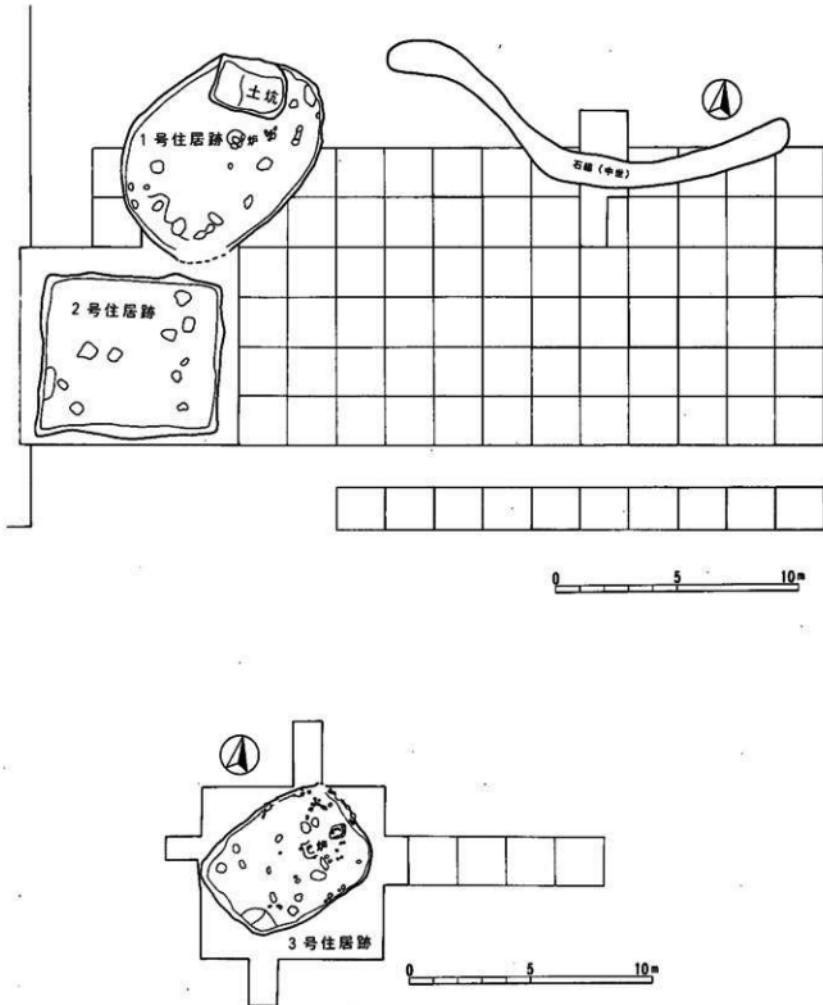


図5 松本深志高校地歴会1971・72年度調査・遺構図（1:200）<「あぜみち21・22号」1972・73を参考に作成。住居はすべて弥生時代後期。土坑・石組は、中世と思われる。>

第Ⅲ章 遺構と遺物

第1節 遺構

調査は跡跡中心部範囲内をI～IV区まで4ヶ所部分的に調査し、縄文時代後期前半掘ノ内式期土坑1基<土坑7>、弥生時代住居跡32軒・弥生時代溝1基<溝1>（古墳周溝に切られ、直角的に曲がった溝で方形周溝墓のコーナー部分と考えられる）、古墳1基、古墳の周溝の一部と思われる溝1基<溝2>、古墳時代中期（5世紀後半～6世紀前半）土坑2基<土坑2・4>（土坑2は土壤墓、土坑4は古墳の主体部の可能性が強い）、平安時代土坑2基<土坑5・6>（両者とも土壤墓と考えられる。土坑6は検出面より完形の黒色土器杯が出土。土坑5は周辺より平安時代の土器が出土）、中世の建物跡を伴なうと思われる窪穴1基、中世の土坑2基<土坑1・3>、中世の建物跡の一部と思われる柱穴群2ヶ所、土器<Ⅲ区北端とIV区南側で確認>と弥生時代集落、中世居館跡を中心に小規模な調査範囲でありながら多数の遺構が検出され、一大遺跡であることが確認された。以下中心となる弥生時代住居跡の概略を記す。

・ 弥生時代住居跡

検出された住居跡すべて弥生時代の窪穴式住居跡であった。32軒中、35号住居跡が中期前半、8、28号住居跡が中期後半の他は、すべて弥生時代後期に属するものである。以下各住居跡を形状・規模・主軸・主柱穴本数・炉の形状、その他（貯蔵穴・周溝など）の順に概略を記す（住居跡は略し、○住と記し、規模は全体を検出できないものが多数で短軸のみ判るものは短、長軸の規模がはっきりしないものは不明、主柱穴本数で()を付けたものは推定である。）

- 4住——小判形、短4.35m、N8°W、(4本)、石圓埋甕炉、炉北側にも柱穴有、東壁際一段高い。
- 5住——小判形、長5.15m、N10°W、(4本)、石圓埋甕炉（内部土器片散）、ベッド状遺構・新臼2面有、貯蔵穴2<入口と入口に近い主柱穴横>、7住に切られる。炭化材有、焼失家屋。
- 6住——隅丸長方形、不明（大型な住居跡）、N5°E、(6本)、石圓埋甕炉、南西隅に完形品多し。11・12を切る。
- 7住——隅丸長方形、不明、N33°E、不明、貯蔵穴1<入口>、5住を切る。
- 8住——隅丸方形、4.4×4.4m、N0°、(4本)、地床炉、貯蔵穴2<奥壁寄り>、剝片集中区有。10住に切られる。
- 9住——小判形？、不明、N10°E、古墳周溝・土坑5に切られる。
- 10住——隅丸長方形？、不明、N25°E。
- 11住——不明、12住に切られる。
- 12住——小判形、5.4×4.4m、N38°W、4本、石圓炉、6住に切られる。
- 13住——不明、15住に切られる。
- 14住——小判形（橢円形）、5.4×4.2m、N85°W、4本、石圓炉、貯蔵穴1<入口>。
- 15住——小判形、短7.4m（大型な住居跡）、N90°W、(4本)、石圓埋甕炉、周溝有、炉南西側に崩上半部完形の壺が入ったピット有、17・33住を切る。
- 16住——隅丸長方形、6.05×5m、N58°W、不明、貯蔵穴1<入口>、17住を切り、26住に切られる。
- 17住——小判形（隅丸長方形）、8.3×6m、N38°W、(4本)、石圓炉・掘り方のみ（炉2ヶ所有）、15・16住に切られる。
- 18住——小判形（橢円形）、9.4×5.2m（大型な住居跡）、N30°W(4本)、石圓埋甕炉、掘り方のみ（炉

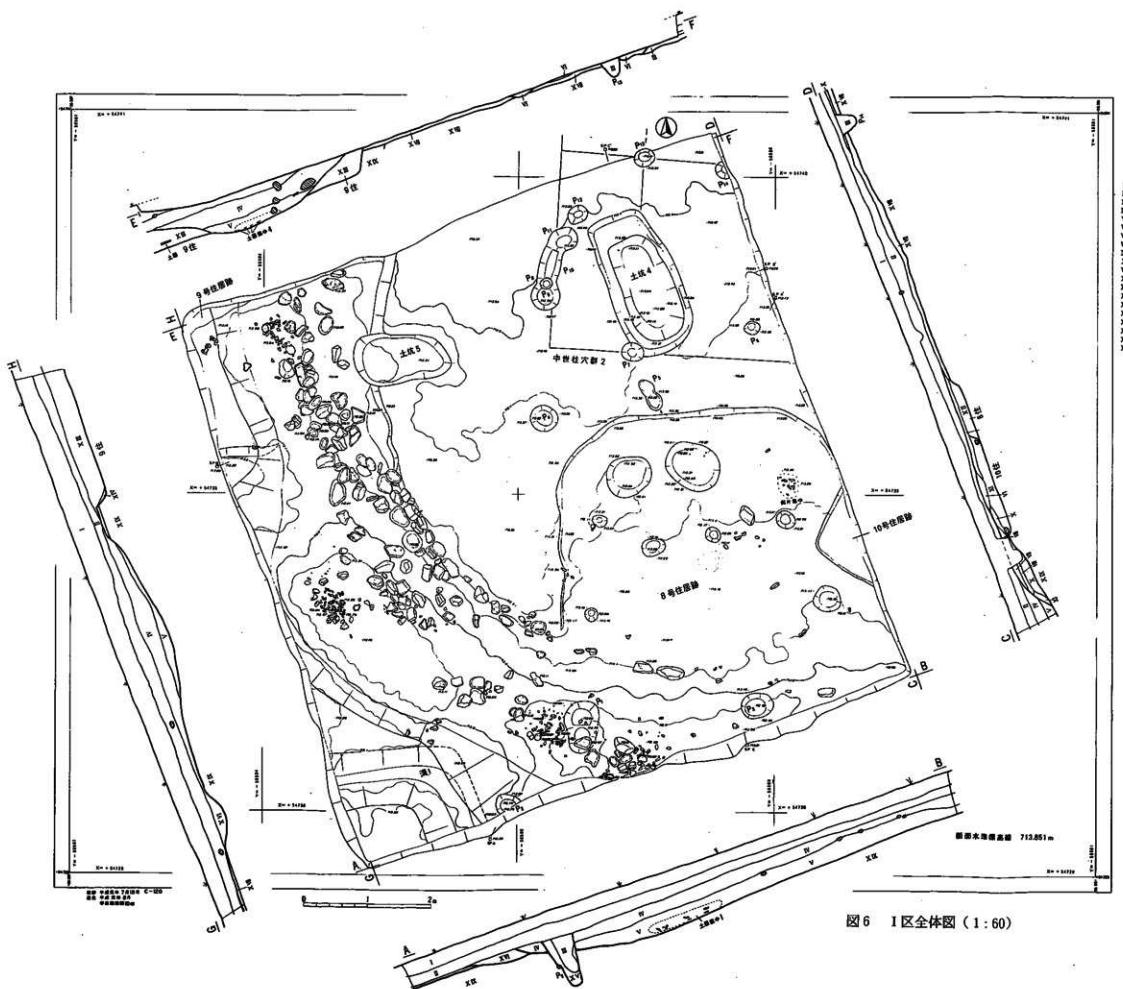


図6 1区全体図 (1:60)

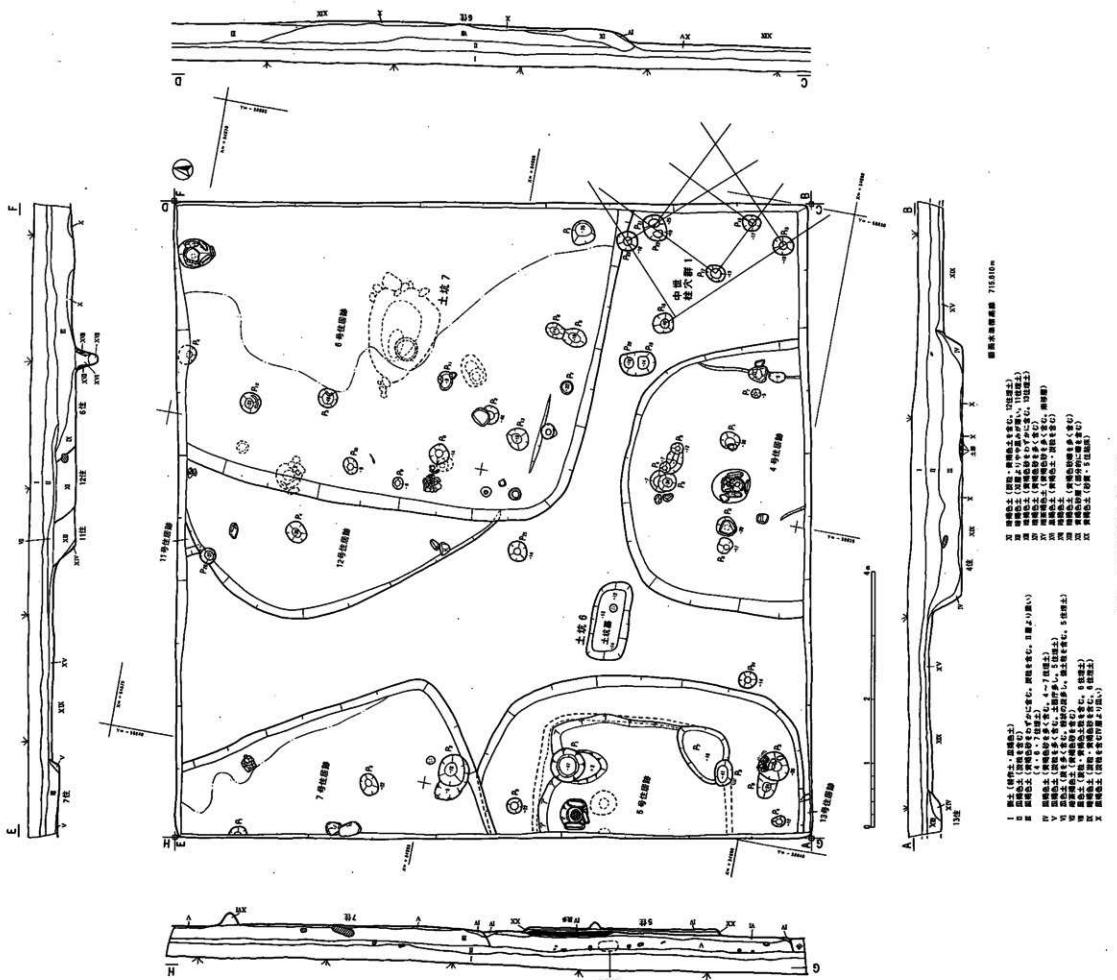


図 7 II区全体図 (1:60)

No. 1 古城遺跡遺構平面図（Ⅲ区）

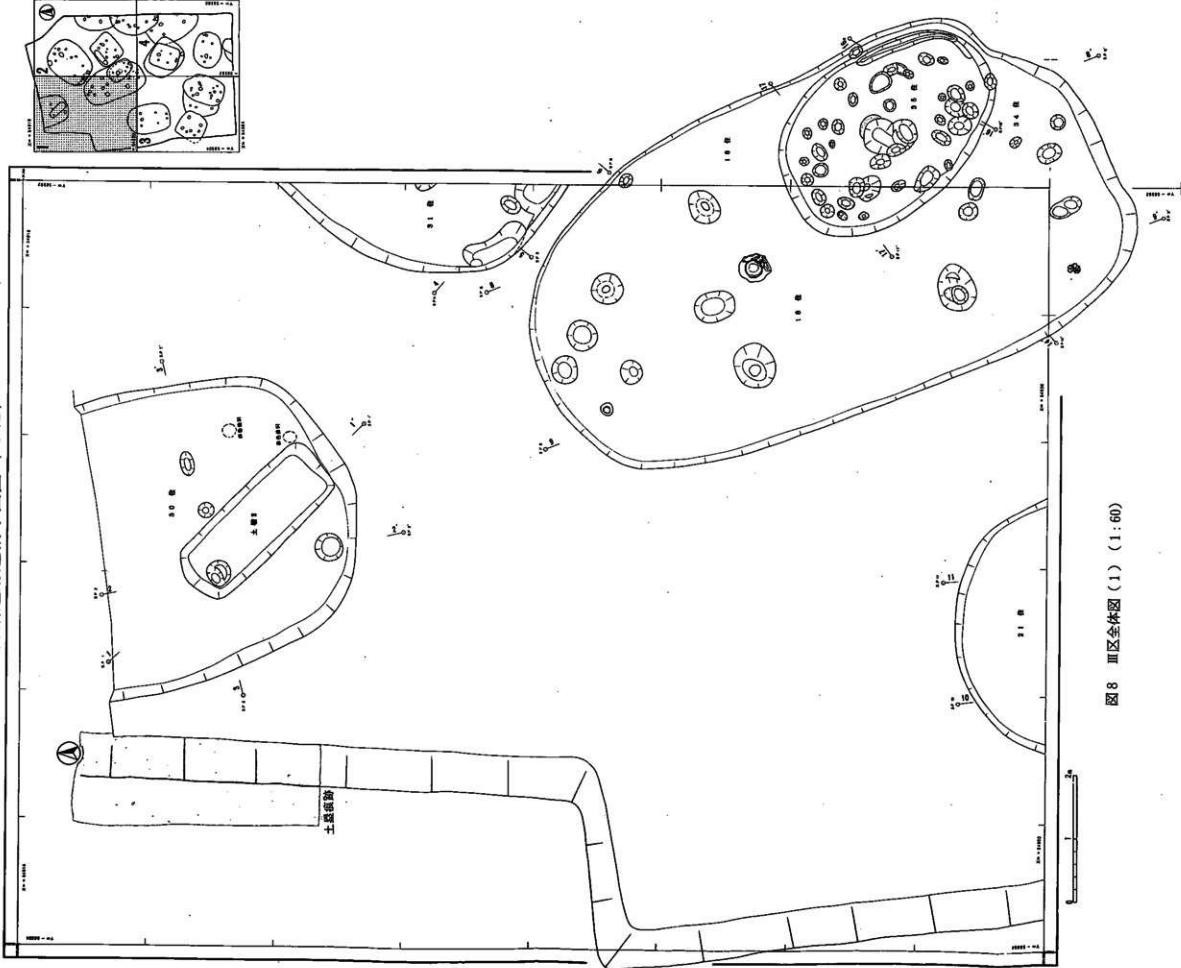


図8 Ⅲ区全體図 (1) (1 : 60)

古城遺跡遺構平面図（Ⅲ区）

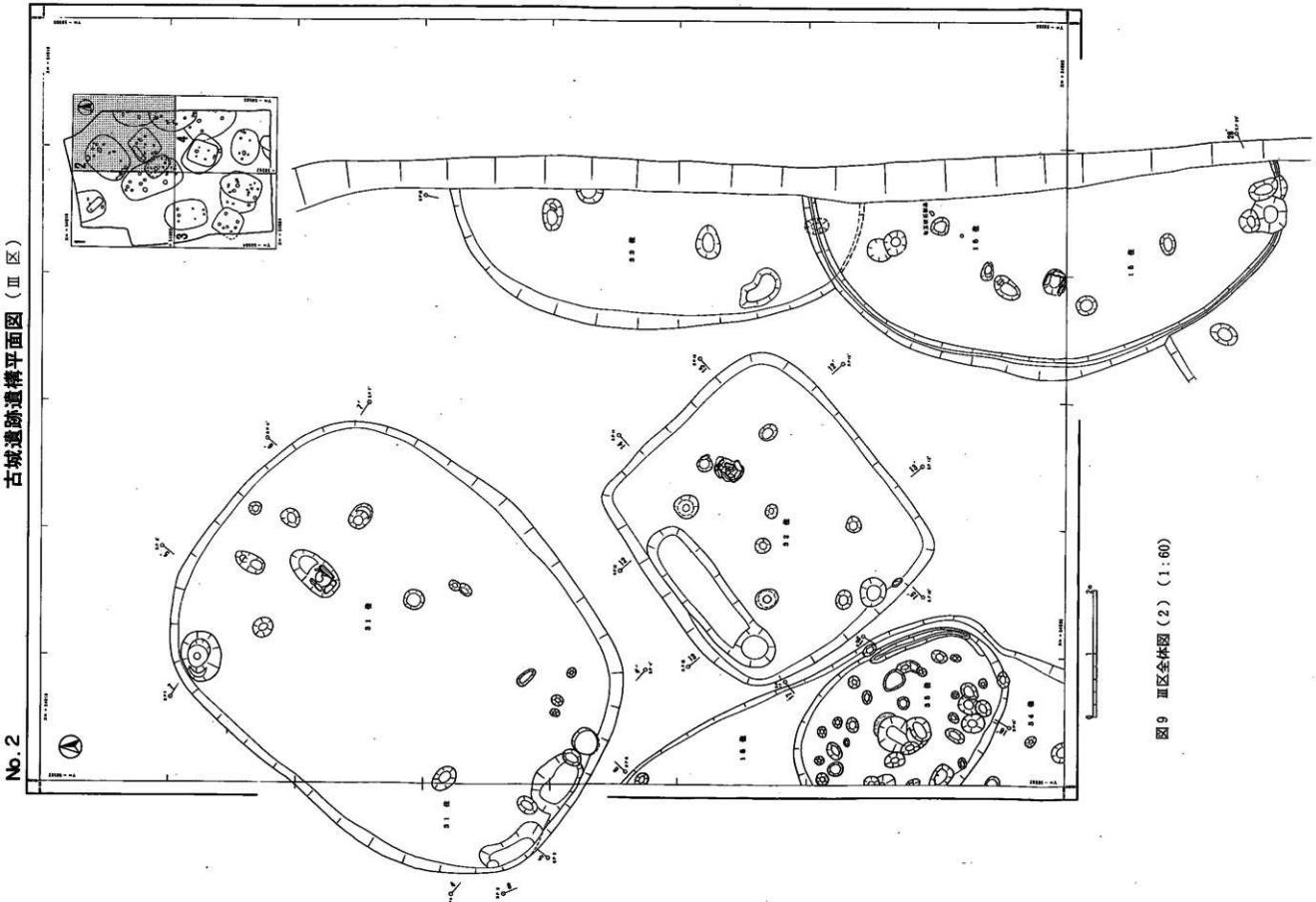


図9 Ⅲ区全体図(2) (1:60)

No.2

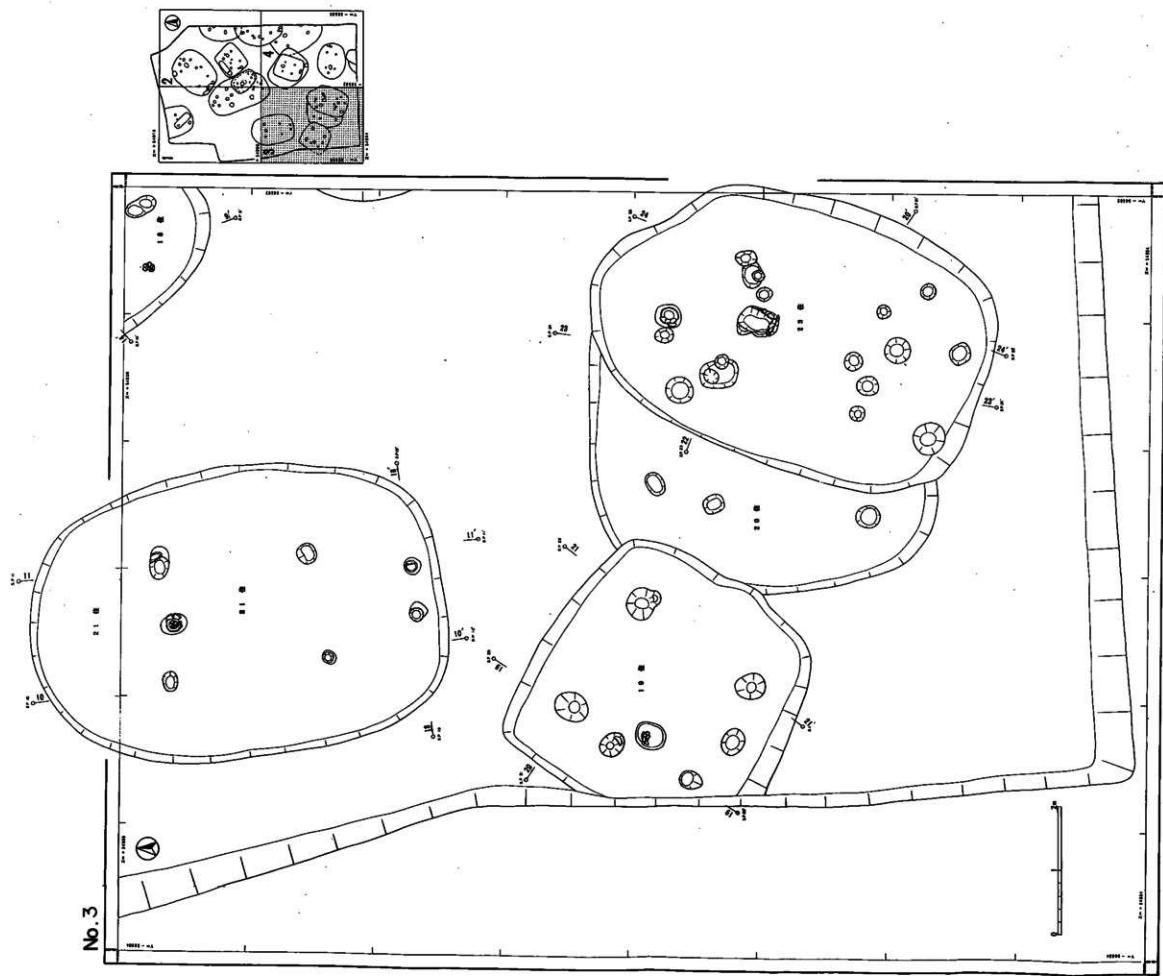


図10 Ⅲ区全体圖（3）（1:60）

No. 4 古城遺跡遺構平面圖（Ⅲ區）

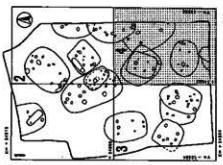
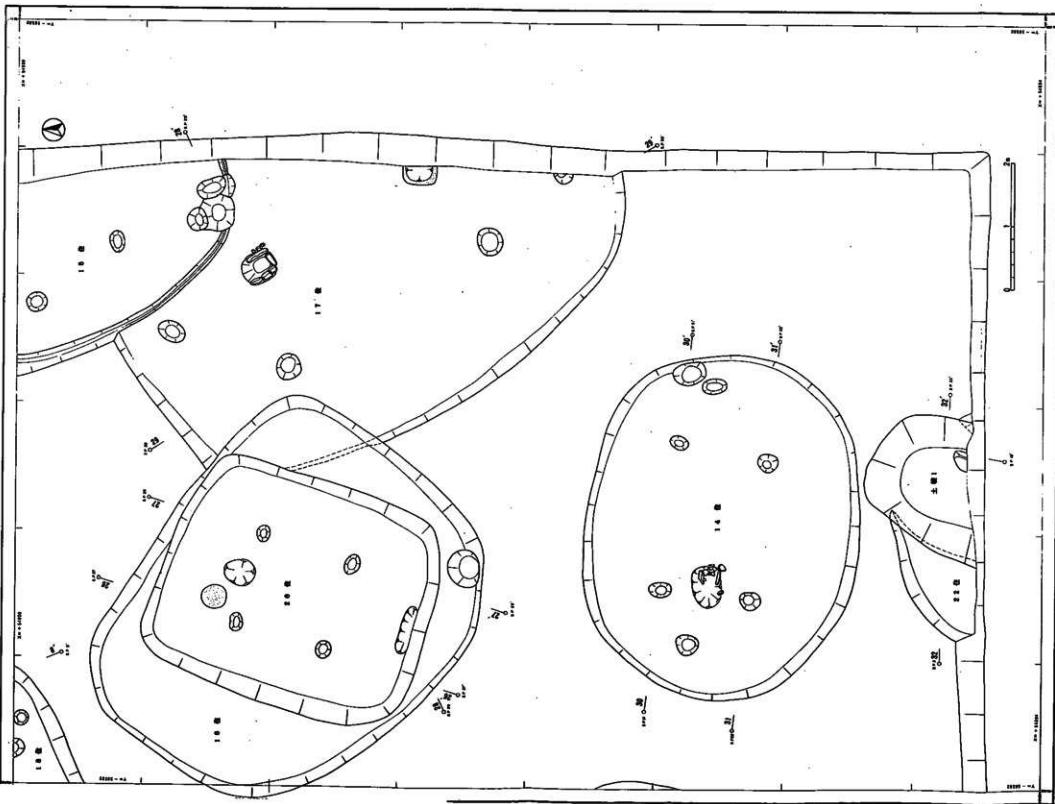
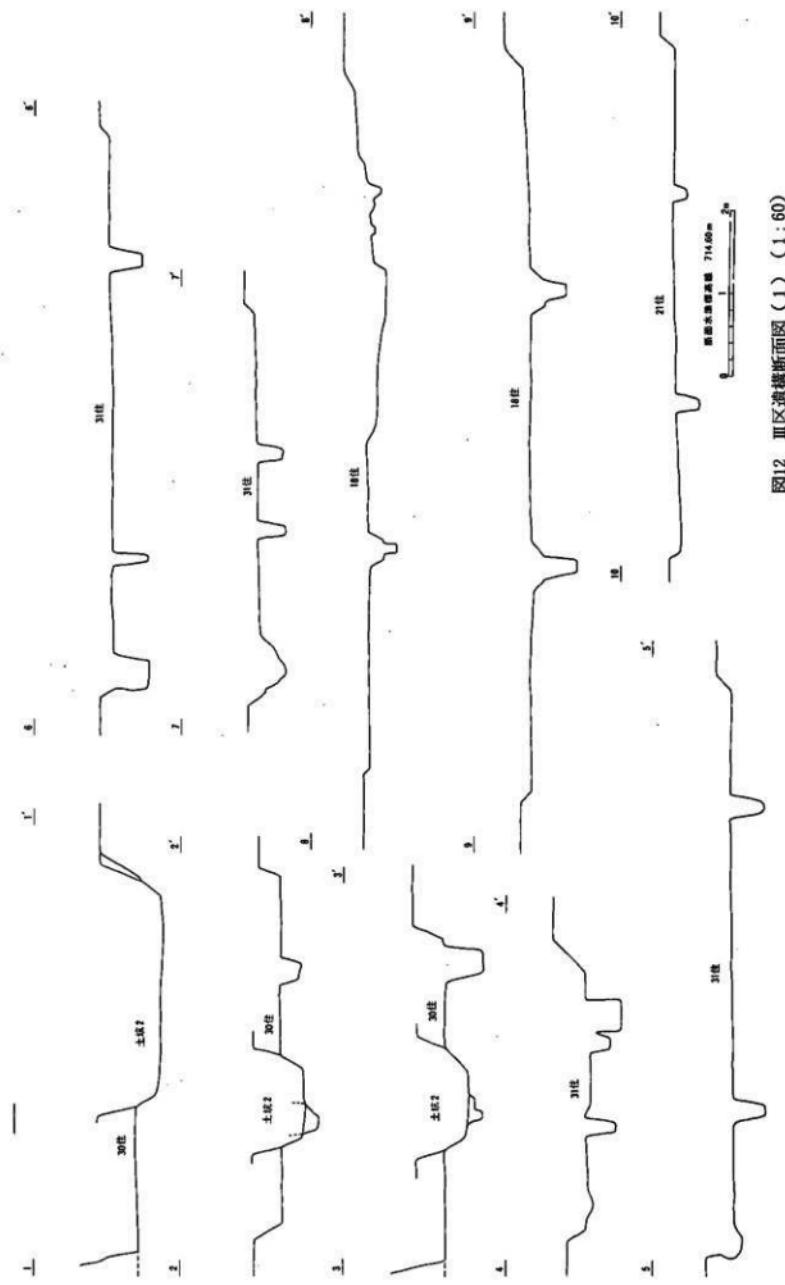


図11 Ⅲ区全体図(4)(1:60)



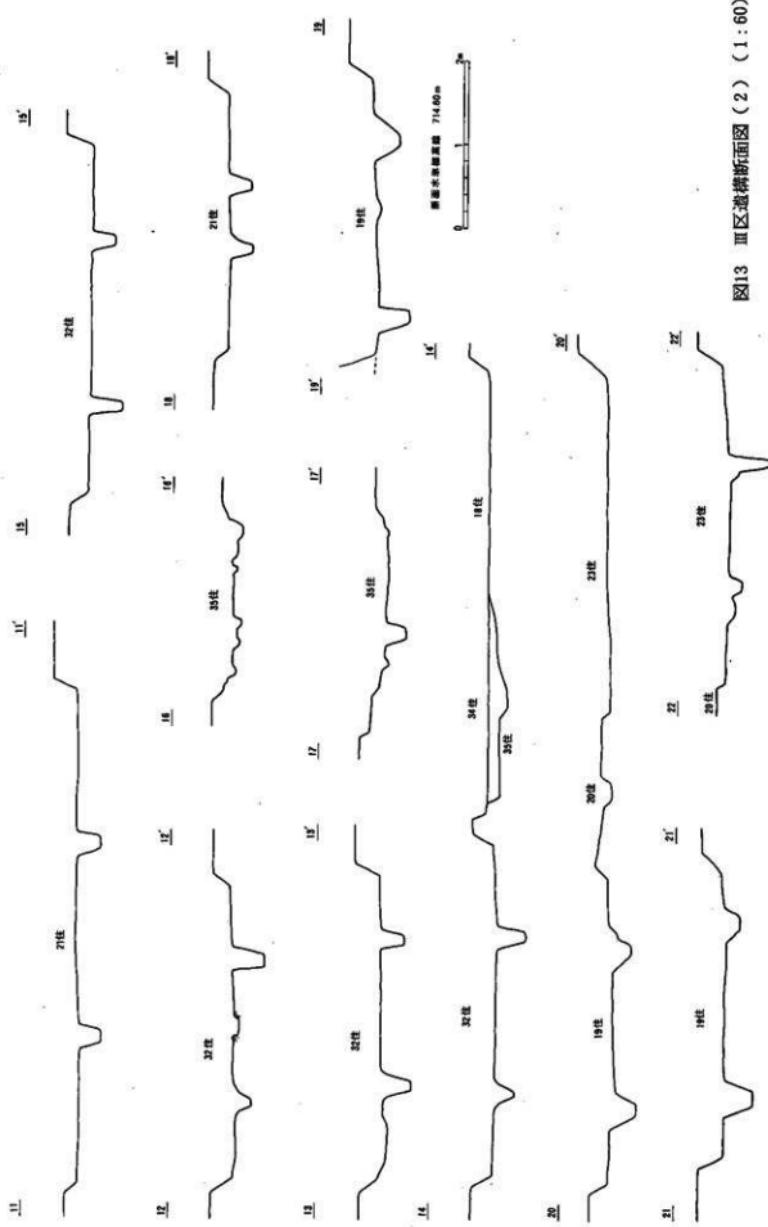


図13 III区遺構断面図(2) (1:60)

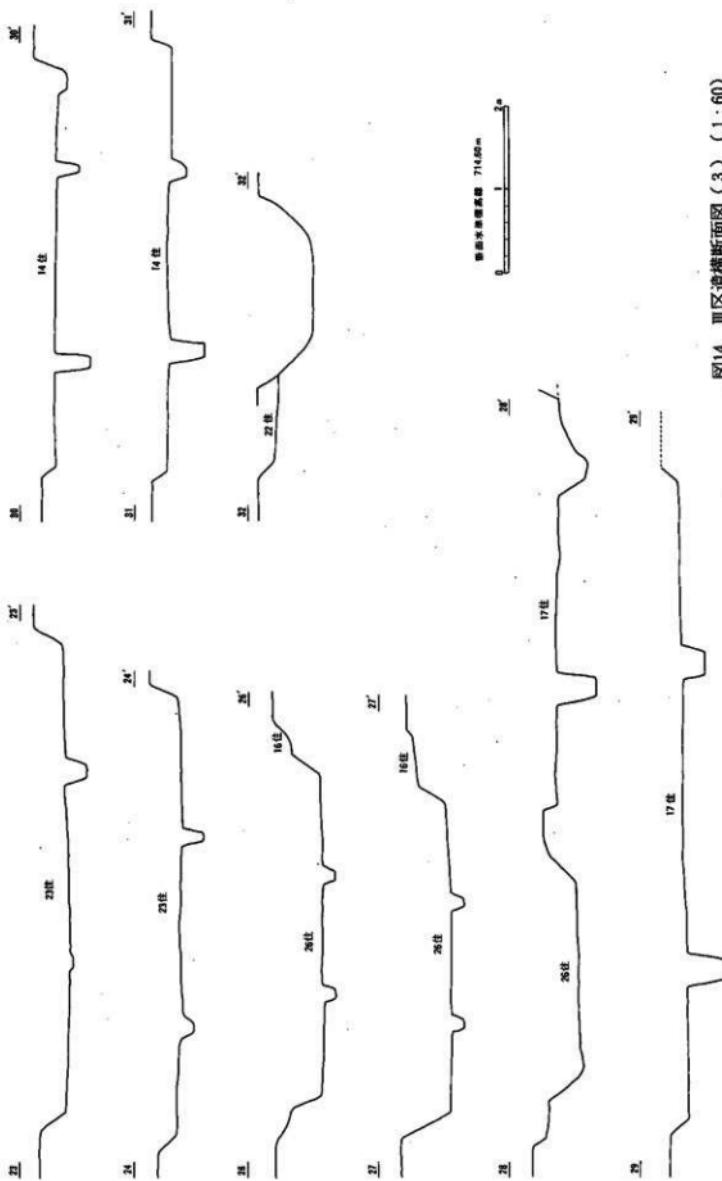


図14 III区造橋断面図(3) (1:60)

- 2ヶ所有)、35住を切り、34住に切られる。
- 19住——隅丸方形、 $4.2 \times 4.2\text{m}$ 、N 57° W、4本、掘り方のみ、20住を切る。
- 20住——隅丸方形？(小判形？)、長 5.4m 、N 0° 、(4本)、19・23住に切られる。
- 21住——小判形、 $6.55 \times 4.6\text{m}$ 、N 7° W、4本、石囲埋甕炉(内部は土器片敷)。
- 22住——小判形、短 3.65m 、N 10° E、不明、土坑1に切られる。
- 23住——小判形(隅丸長方形)、 $6.3 \times 4.3\text{m}$ 、N 20° E、4本、石囲炉・埋甕炉(炉2ヶ所に有)、貯藏穴1<入口>、立て替え有。
- 24住——隅丸長方形(小判形)、 $6.4 \times 4\text{m}$ 、N 77° W、(4本)、石・土器片囲土器片敷炉、25住を切る。
- 25住——不明、24住、豎穴1に切られる。
- 26住——隅丸長方形、 $4.3 \times 3.65\text{m}$ 、N 17° E、4本、地床炉、炉の北西に焼土有、16住を切る。炭化材多し焼失家屋。
- 27住——小判形、長 6.8m 、N 0° (4本)、不明、貯藏穴1<入口>、28住を切る。
- 28住——不明、埋甕炉。
- 29住——小判形？、短 4.2m 、N 70° E、不明、溝2に切られる。
- 30住——小判形、短 4.7m 、N 17° W、(4本)、不明、貯藏穴<入口>、床面上に赤色塗料の散布2ヶ所有、土坑2に切られる。
- 31住——小判形、 $7.2 \times 5.6\text{m}$ 、N 41° E、4本、石囲埋甕炉、貯藏穴3<入口部分2、奥壁北側1>。
- 32住——隅丸方形、 $4.4 \times 4\text{m}$ 、N 48° E、4本、石囲土器片敷炉、貯藏穴1<入口>、北壁側に浅い溝状の遺構有。南西側に完形土器2ヶ所置いたような状態で有。
- 33住——小判形、長 6.5m 、N 5° E、(4本)、不明、西壁側の南側に粘土を囲め1段高い部分有。15住に切られる。
- 34住——隅丸方形(小判形)、 $4.2 \times 2.8\text{m}$ 、N 38° W、4本、石囲炉、炭化材があり焼失家屋。18・35住を切る。
- 35住——楕円形、 $3.6 \times 2.6\text{m}$ 、N 38° W、不明、地床炉、床面に小ピットが多数有、東壁南側に周溝有。
- 以上のように、本遺跡における弥生時代後期住居跡の特徴としては、石囲炉(石囲埋甕炉)が14例と他地域に比べ比較的多いことがあげられる。コの字形石囲8例(4・5・6・14・15・17・31・34住)、L字形石囲3例(12・18・23(旧)住)、ほぼ全周する石囲1例(32住)、枕石状に1ケ石を置いたもの1例(21住)、石と土器片で囲ったもの1例(24住)があり、石囲埋甕炉は7例、土器片を火床に敷いたもの4例や、4住戸のように埋甕炉の周囲に土器片を詰め、埋甕内に土器片を敷くように置いた複雑なものも見られ、埋甕炉に蓋を使用しているものも6例ある。また、住居内の入口と思われる部分の横に貯藏穴が見られるものが9例あるのも特徴である。住居プランは、小判形(楕円、隅丸長方形に近いものもある)のものが多いことも特徴で、隅丸方形(比較的方形に近く、やや長方形のものもある。19、26、32住など)は、後期の中でも新しい時期の住居跡であることから、本地域における弥生時代後期の住居は、小判形(楕円形)ないしは、これに近い隅丸長方形(隅丸長台形)であり、後期でも終末になり隅丸方形化したことが予想される。そして、6・15・18住のような大型な住居も見られ、特に15住は幅辺は7.4mあることから長辺は10mを越す大型住居跡と考えられる。

No.5

古跡遺跡遺構平面圖 (IV區)

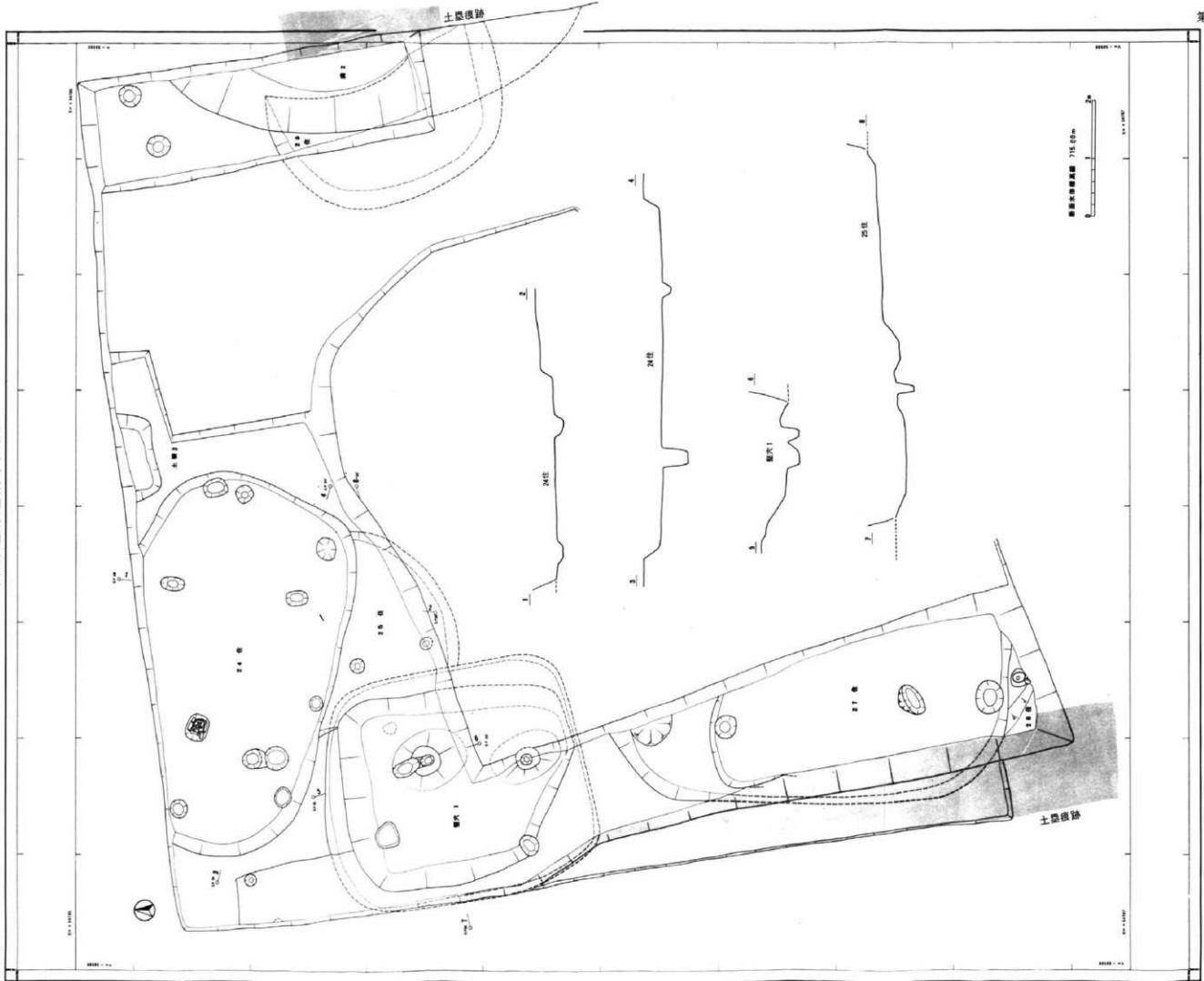
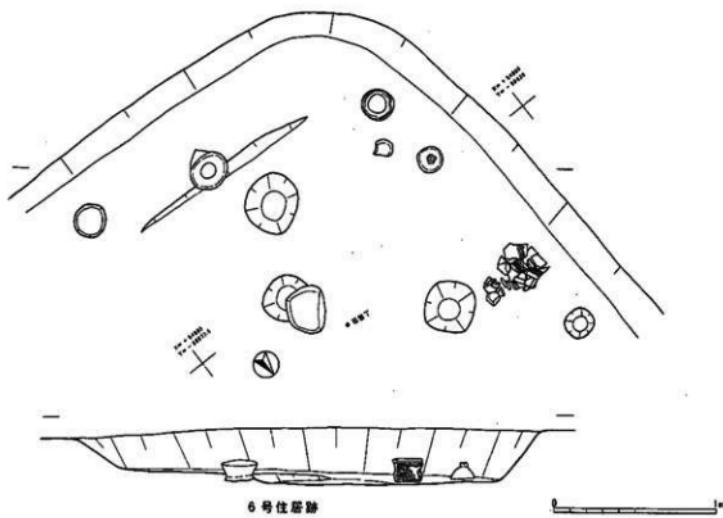
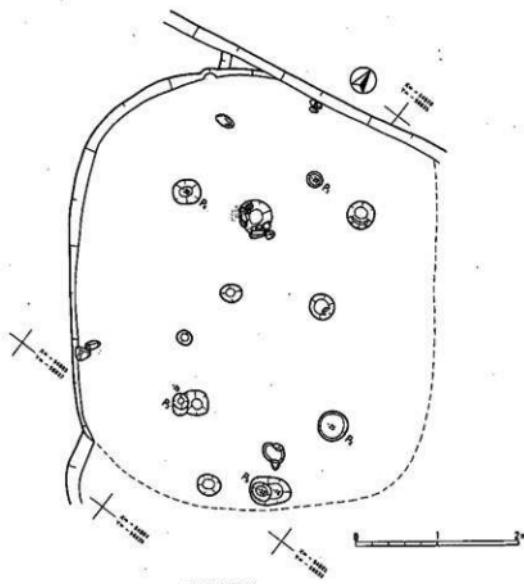


圖15 IV區全體圖 (1:60)

第1節 遺構

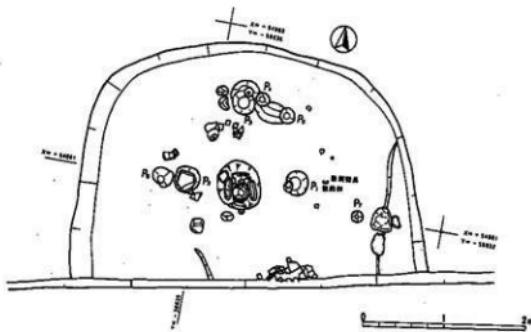


6号住居跡



12号住居跡

図17 II区 6号住居跡南西隅遺物出土状況（上・1:30）、12号住居跡（1:60）<6住は、11・12住を切り、12住は11住を切っている。12住の約半分は6住に貼り床されていた。6住南西隅には、高杯2、甕3個体が置かれたような状態で出土した。>



4号住居跡

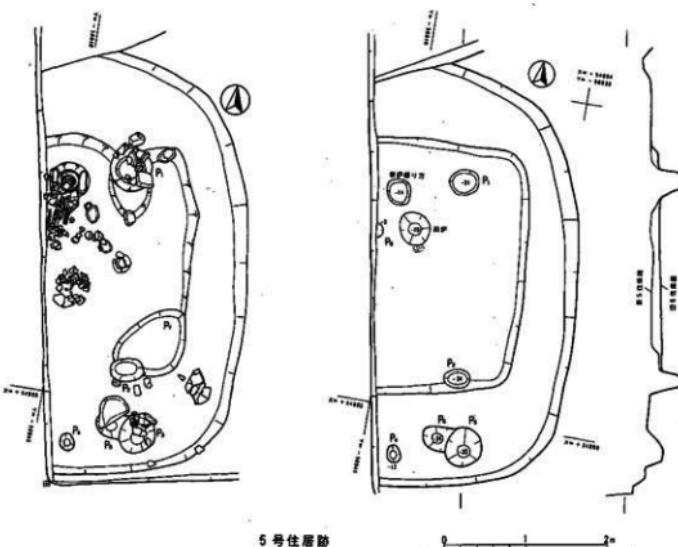


図16 II区4号住居跡(上)、5号住居跡(新)(左下)遺物出土状況、5号住居跡(旧)(右下)
 (1:60) <4住は精円形プランの4本主柱と思われる。炉は、壺・甕を複雑に組み合わせた、石囲い埋甕炉である。床面より約5cmぐらいういて、鉄製釣針・鉄製刺突具が並んで出土した。5住は、精円形的な隅丸方形プランの4本主柱と思われる。この住居跡は壁に近い部分の床面が高くなっているベッド状造構となっていました。主柱穴は変更せず、改築したらしく、低い部分の床面が2面あり、また炉も上面と下面に検出された。新しい炉は、石囲い埋甕炉で、埋甕炉内部に土器片を敷いたような状態であった。旧炉は掘り方のみであった。P 5・7は貯蔵穴と思われ、P 5内には壺片が貼り付いたような状態で出土し、周辺には粘土塊が見られた。>

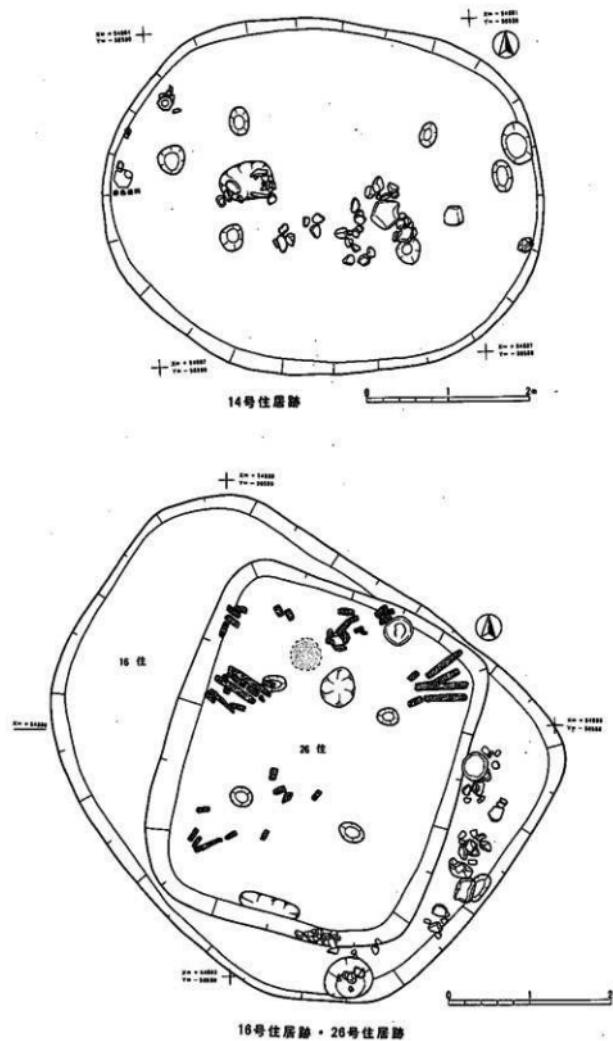


図18 III区14・16・26号住居跡（1:60）<14住は楕円形プランの4本主柱穴である。炉は石囲い炉で、埋土～床面にかけての住居跡中央付近に礫が多少集中し、遺物は壁際に集中する。16住はやや楕円形の隅丸長方台形プランで、26住がすっぽり中央を掘り込んでいる。遺物は南東壁際に集中し、南側コーナーのピットは貯蔵穴と考えられる。26住は隅丸長方形プランで、4本主柱穴である。炭化材が多く焼失家屋と思われる。炉は地床炉的であるが、石があった可能性もある。>

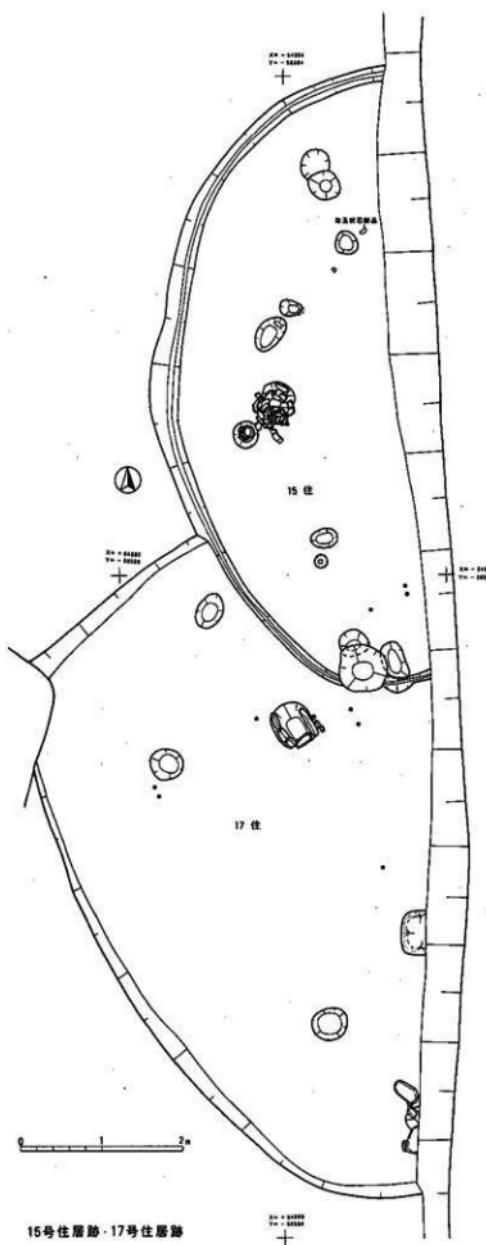


図19 15・17号住居跡（1:60）<15住は17住を切る、大形の住居跡で検出された部分は奥壁側にあたり、短辺として7.4mの長さで、全掘したならば長辺約13mぐらいと思われる。>

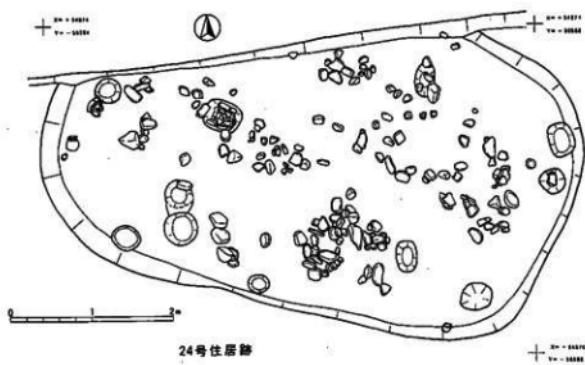
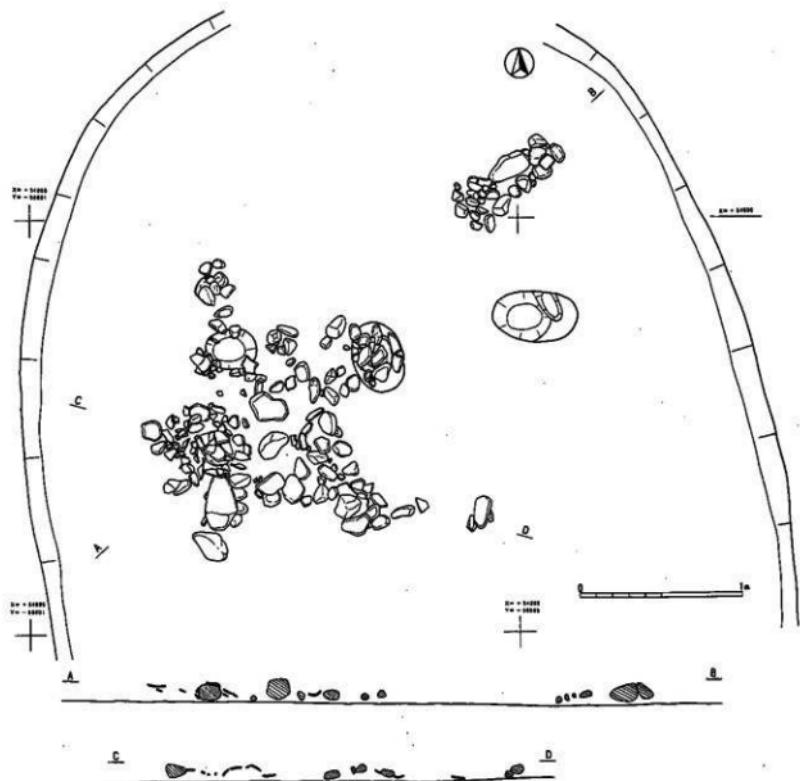


図20 19号住居跡(上、1:30)・24号住居跡(下、1:60) 磚・遺物出土状況<19住は、大・小の磚が炉上～西側と炉の北東側の2ヶ所に集中していた。24住は、住居内に磚が散在する。>

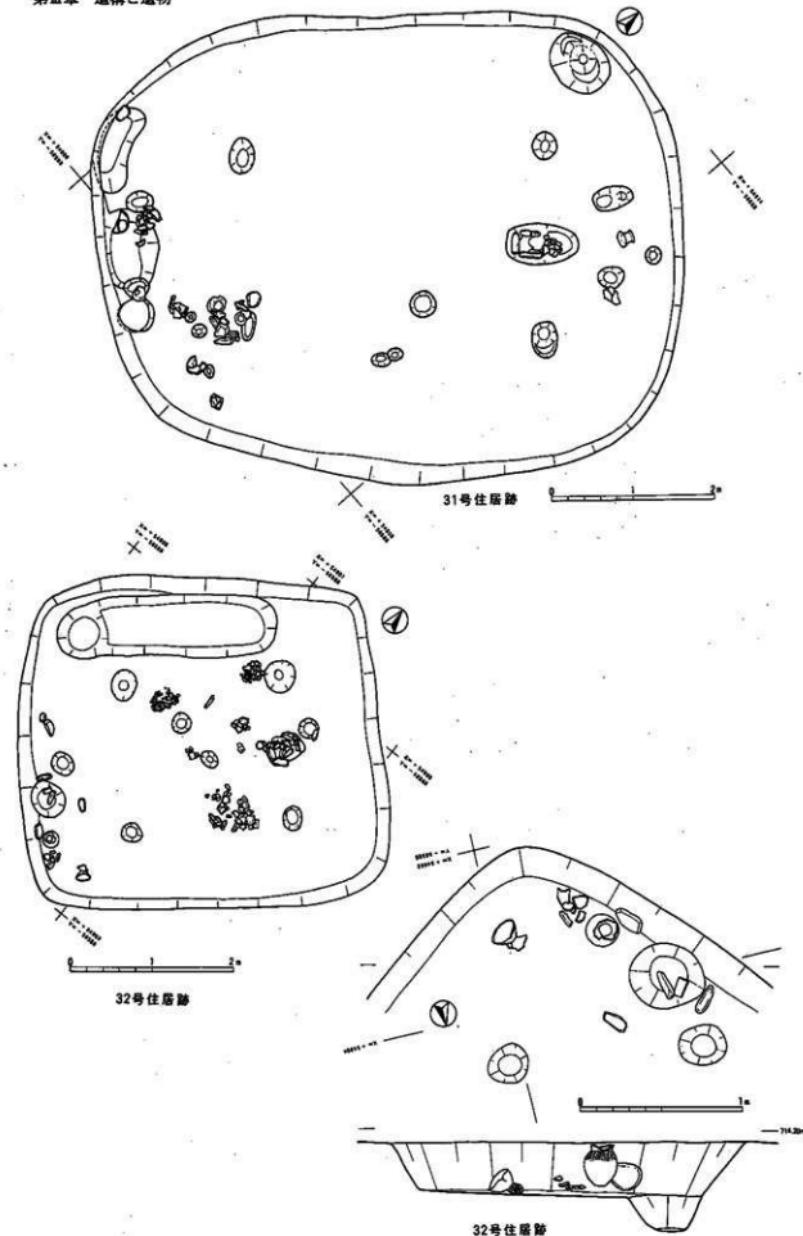
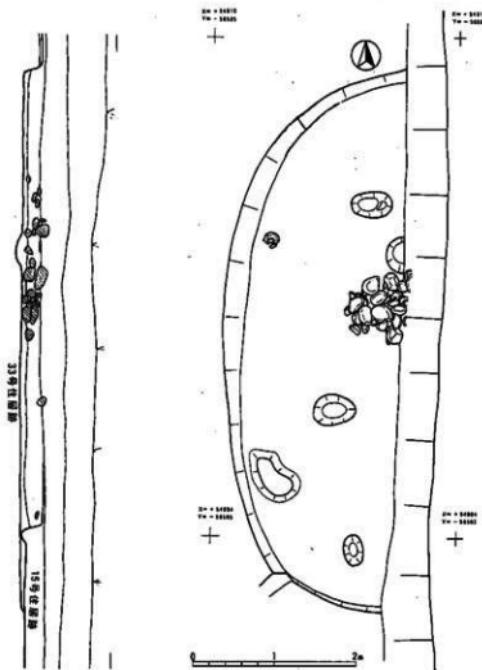
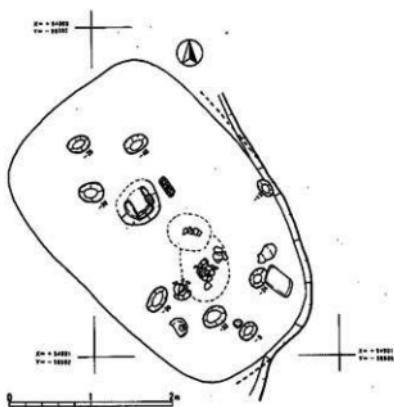


図21 31号住居跡（上、1:60）、32号住居跡（中、1:60、下、1:30）遺物出土状況<31住は炉の北側と南壁側（入口付近）に、32住は炉周辺と南壁側に遺物が集中する。32住の南壁際に高杯と壺が置かれたような状態で出土した。>

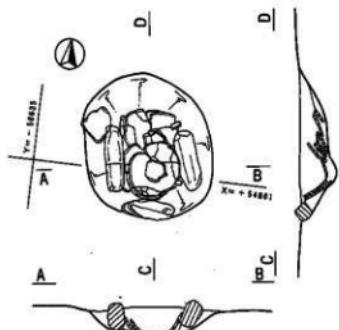


33号住居跡

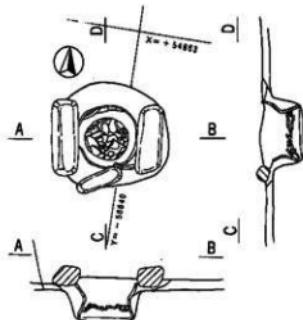


34号住居跡

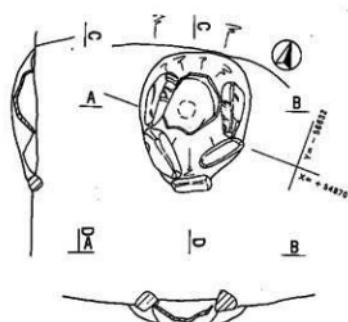
図22 33・34号住居跡 (1:60) <33住の中央やや北側には集石が見られ、その東側で、高杯が伏さった状態で出土した。34住は炭化材が出土し、炭も多く見られ、焼失家屋と思われた。34住は18・35住を切り、床下からは、18住は主柱穴の一部と35住が検出された。>



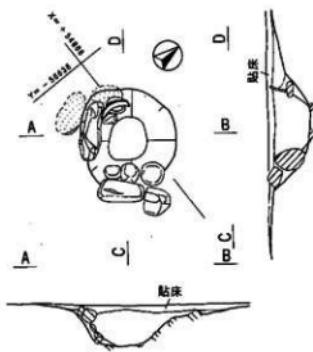
4号住居跡



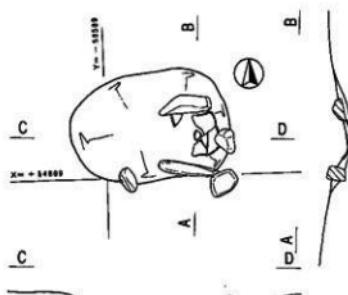
5号住居跡



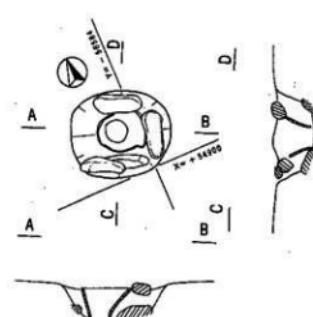
6号住居跡



12号住居跡



14号住居跡

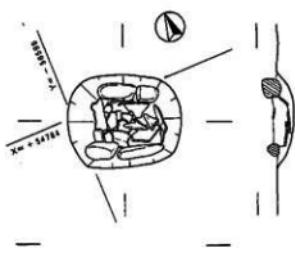


15号住居跡



図23 弥生時代住居跡(1) (1:20、4~6・12・14・15号住居跡) <14住は石囲炉。12住は一部に甕の口縁を使用した石囲炉。4~6・15住は石囲埋甕炉で、4・6・15住は甕を使用。>

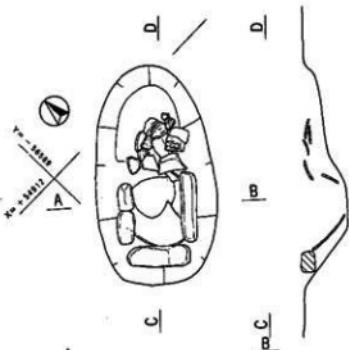
第1節 遺構



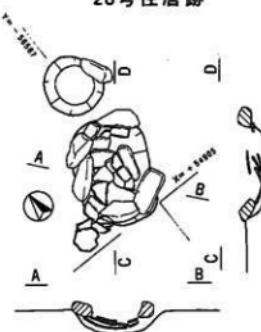
24号住居跡



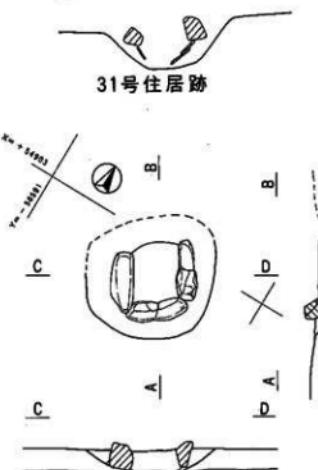
28号住居跡



32号住居跡



32号住居跡



31号住居跡

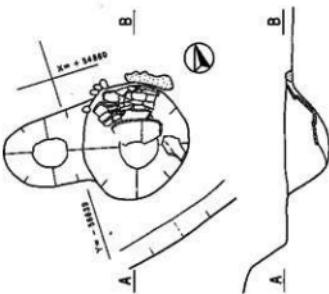
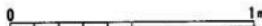
5号住居跡 P₅

図25 弥生時代住居跡（3）、ピット（1:20、24・28・31・32・34・5号住居跡P₅）<24住は石・土器皿土器片敷き炉。32住は石皿土器片敷き炉。31住は石皿埋甕炉（壺使用）。28住は埋甕炉。34住は石甕炉である。5住P₅貯藏穴的なもので、壺片が貼り付けたように出土し、縁には粘土が見られた。>

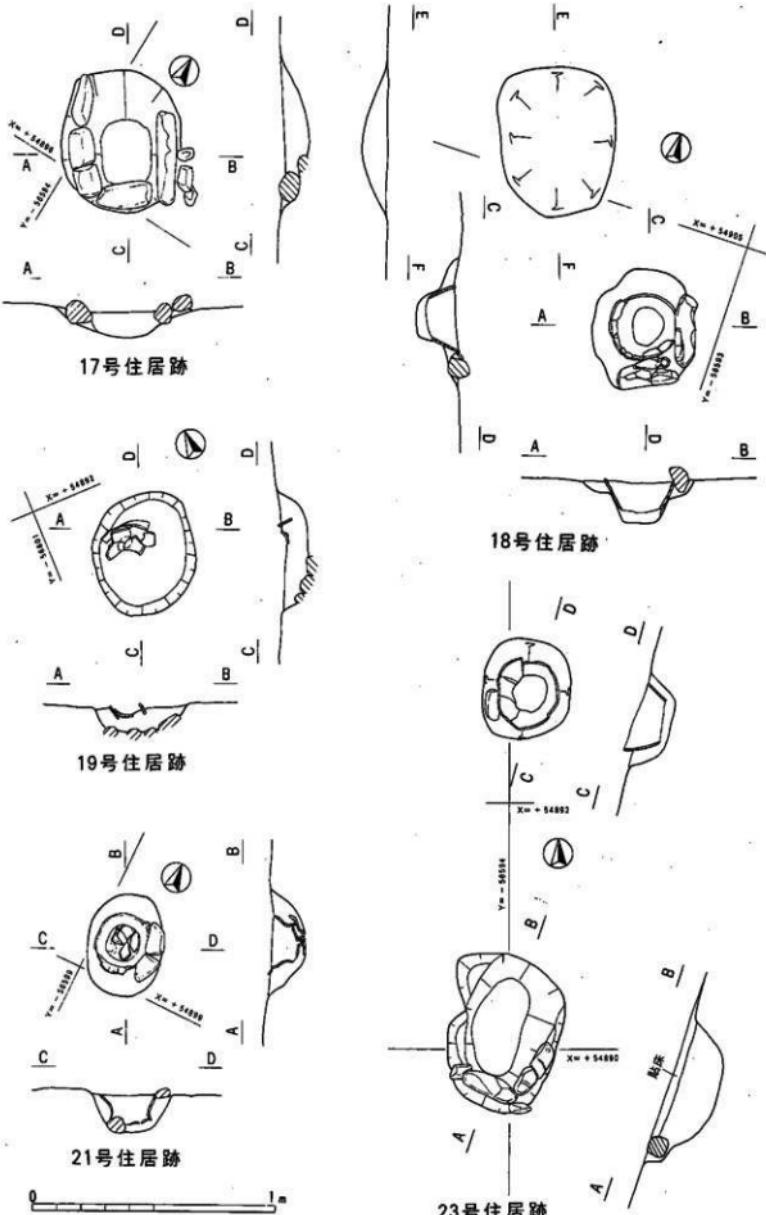


図24 弥生時代住居跡炉（2）（1:20、17～19・21・23号住居跡）<17・23住旧炉は石囲炉。23住新炉は埋甕炉。18住新炉・21住は石囲埋甕炉。18住旧炉・19住は掘り方のみ。18・23住埋甕は壺>

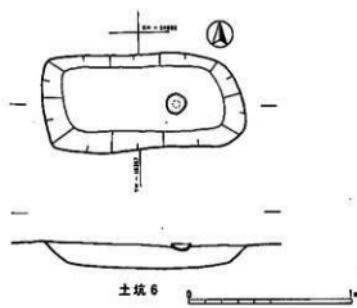
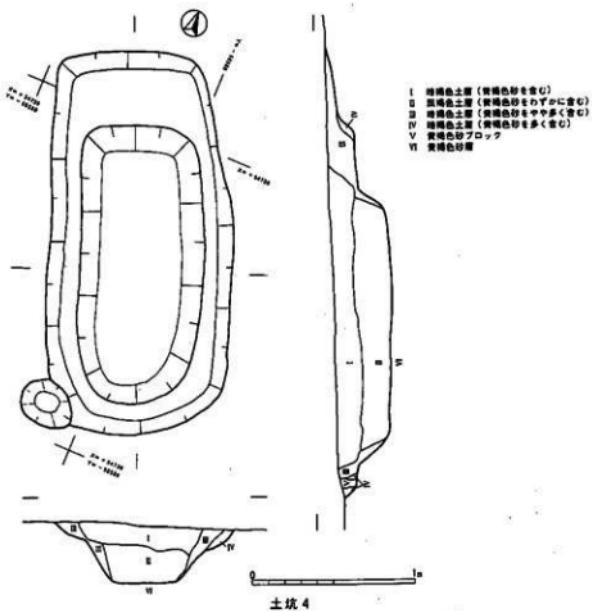


図26 土坑4（上）、土坑6（下）（1:30）<土坑4はI区から検出され、古墳の主体部と思われる。おそらくは、木棺直葬か、そのまま埋葬した直葬と思われる。出土遺物（副葬品）はなかった。土坑6は平安時代の土拵墓と思われ、検出面から黒色土器の完形の杯が1ヶ出土した。おそらく供えた土器と思われる。>

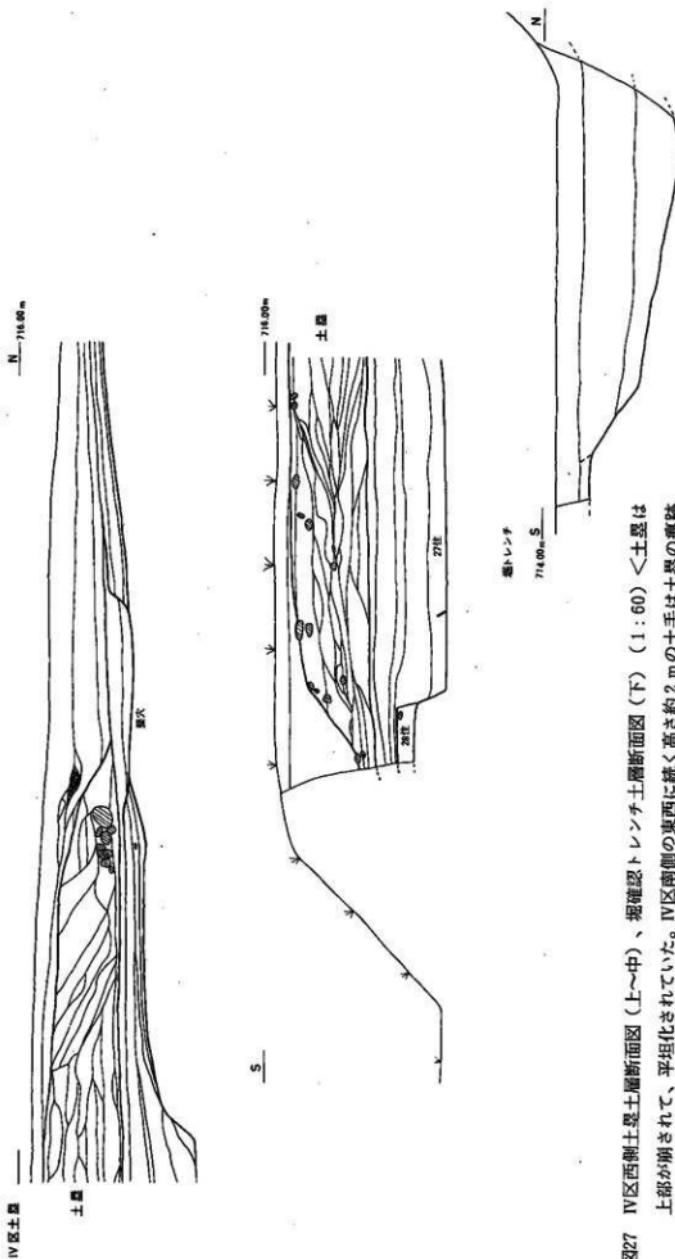


図27 IV区西側土壁土層断面図（上～中）、堀確認トレンチ土層断面図（下）（1:60）<土壁は上部が削されて、平坦化されていた。IV区南側の東西に斜く高さ約2mの土手は土壁の痕跡であることが確認された。土壁土層の下層からは中世前半（13C後半～14C前半頃）の壺穴や遺物などが検出され、土壁の構築はこれ以後であると思われる。土手の南側に接して堀が確認された。>

第2節 遺物 <弥生時代後期出土土器について>

本遺跡からは、前述のごとく小範囲の発掘面積にも拘らず、多数の遺構、それに伴なう良好な遺物資料が検出されている。遺物により時期が明確に把握され得たものでは、弥生時代中期栗林期のものが当段丘上に嘴矢として刻まれるものであり、続いて弥生時代後期～終末、古墳時代初頭へと展開する。加えて、若干の墳丘掘より出土した古墳時代中期及び平安時代土師器などが出土し、また中世に至り、居館として利用されていた時期の陶磁器が注視されるところである。ここではその主体となる、住居が重畠した形で検出された、弥生時代後期出土土器に視点を絞って、その特徴の梗概を述べることとする。

信濃における後期弥生土器を代表とする型式として、中部高地型櫛描文と、特に供膳形態土器に赤色塗装を施すという特徴を持つ「箱清水式土器」は、近年の発掘成果により、増え千曲川水系を主体として、発生・展開を遂げ、その影響が信濃北半から甲府盆地に至るまで広大な範囲に、波及していることが確認されているところである。しかし、犀川水系以西については、これまで発掘調査の事例に乏しく、模倣として、箱清水式土器文化圏の範囲に、その位置付けがなされることは、指摘されていたが、土器組成・内容については、地域色を明確に提示するまでには至っていないかった。今回発掘された、古城遺跡の31軒を数える弥生時代後期～古墳時代初頭の住居址出土資料は、これまでの北安曇地域の当該時期資料の欠落を埋め、近年盛んに箱清水式土器分布圏内に於ける、各地の地域色の研究が蓄積されているところであり、本地域色を思考する上で、看過できない成果を収めることが出来たと思う。

しかし、今回報告書に掲載された資料は、出土資料のすべてに及んだものではなく、その検証も不充分なものであり、以下に記載する型式的特徴は、現時点での所見を述べた暫定的なものとし御理解頂きたい。また、概念的にその型式的変遷観を別表にして表しておいたが、「段階」については、無意味な混乱を避けるため、千野分類（千野 浩 1989「信濃」41-4）に準拠している。

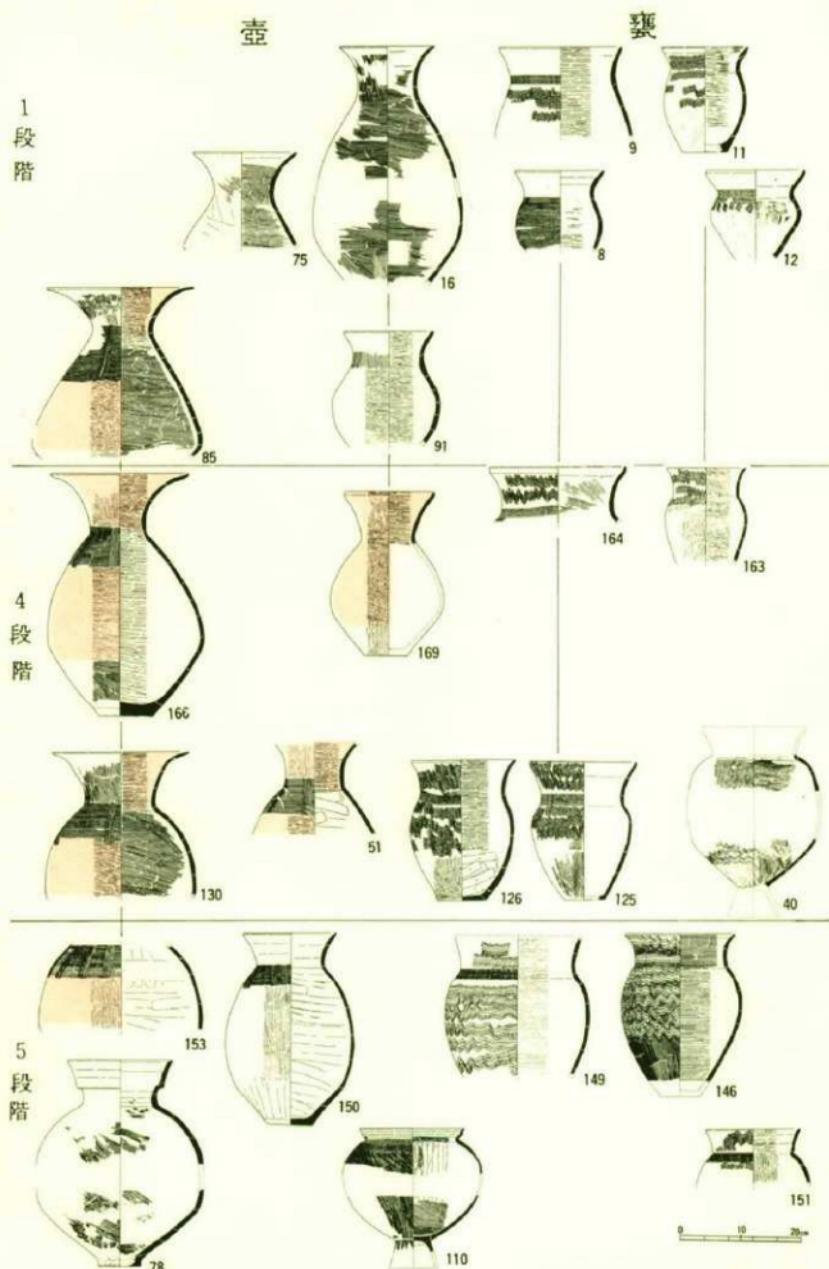
すなわち、1段階が長野市吉田高校グランド遺跡出土資料を指標する、吉田式段階平行。2、3段階には当遺跡では明瞭な遺物が発見されていないが、4段階に至って切り合ひ関係も多く盛行した時期としてとらえられる。5段階には、外来系土器群の共判が見られる後期最終末あるいは古墳時代初頭として位置付けられる資料である。

それでは以下、第4段階を中心にして器形別に地域色の発現形態の特徴を要説していきたい。

器種は、壺、甕、台付甕、钵、深鉢、甑、高杯があり、壺に比べ甕が際立って多く存在するということはない。

①壺 口縁部は弓状に強く外反するものと、口径が狭く若干外湾するものの二種類が、4～5段階に渡って存在する。胴部は長胴形で、胴下半が括れるものであるが、北信に通有な極端に胴下半が削げ、稜線が明瞭なものはない。施文は、頸部に櫛描T字文を描くが、希に簾状文との組合せ、あるいは櫛描J字文をもつ壺がある。粘土円板を貼付加飾する例は、現在のところ見られない。終末期になるにしたがい、頸部から胴部の屈曲が顕著になり、球胴化する傾向は他地域と同容であり、別に「いちじく形」胴部の壺も併存する。頸部文様帯と胴下半を除く、器外面・口縁部内面は、笠磨きの後、赤色塗装されるが、当地域色として口縁外面が磨きを施さず、かつ赤色も施されないものが多く存在することが指摘できる。

②甕 1段階吉田式伴行のものは、胴上半に最大径を有し、倒卵形を呈すものである。比較的頸部の外反は緩く、口縁部が無文のものが主体を占める。口縁無文のものは、刷毛整形後に強い横位ナデが行われる。頸部には、右回りの簾状文を施文するものを基本とし、等間隔止め縦状文をなす。次いで胴下半に波状文が描かれる。これら在地性の強い土器の中にあって、胴上半部に斜行短線文が施される、座光寺原式の影響を受けた甕(12)が共伴している。



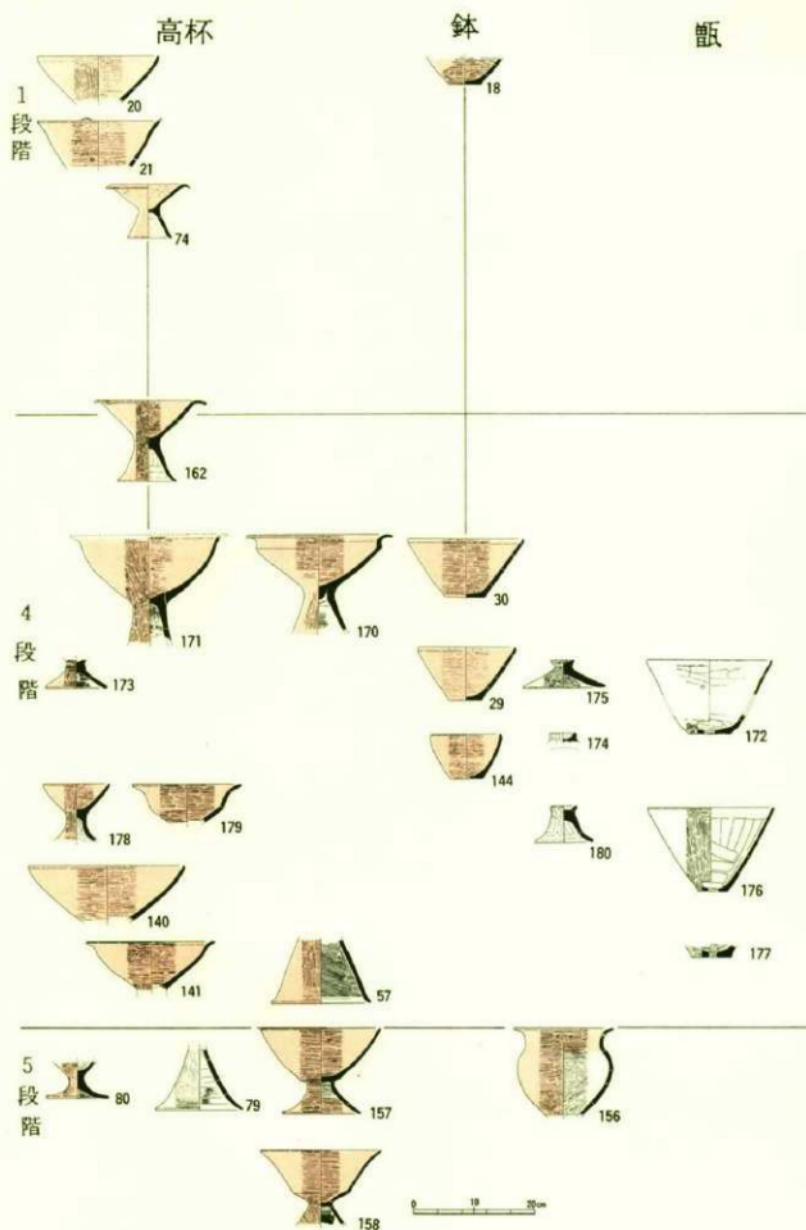


図28 古城遺跡出土弥生時代後期土器模式図（1:8）

4段階に至り、口径と胴径がほぼ一致する、胴長の器形が一般的であり、頭部に簾状文・口縁と胴上半に波状文を描く。調整は、胴下半を綾位に、口縁内面は横方向に磨くものが主体であるが、内面胴部分を刷毛あるいは箇状工具によるナデのみで、磨きを施さない妻の比率が他地域に比べ多いと思われる。また、内面胴下半に削りの施される、北信の影響を受けた妻（126）も見られる。この段階から、高台付妻が組成に加わる。5段階になると在地性の妻に、球胴化が見られ、外来系土器（146・151）も定着している。

③高杯 1段階以降、杯部椀状のものと、口縁部が屈曲して鉗状に開くものの2種類が存在する。4段階前半になり、杯部中央に屈曲をもち、背に高い末広がりの脚部のものが新たに加わり、口縁部が水平に屈曲し、鉗状に開くものが妻として登場していく。杯部椀状のものは安定して残る。

5段階になると、北陸の影響を受けた高杯（157・158）が存在するようになる。赤彩は、杯部内面及び外面全体にわたって施されるが、赤彩がなされないものは（79）と、現在のところ1個体のみであり、赤彩傾向は極めて顕著である。

④鉢・深鉢 4段階において、体部が直線状に伸び比較的大形のものから、椀状を呈する小形のものへと移行するようであるが、既に、1段階より赤彩を施し、形態において後期を通じ、それほど器形に変化がなかったものと考えられる。深鉢（156）は、5段階の資料のみである。口縁部が強く外湾し、全外面及び口縁部内面を赤彩し、二孔一対の緊縛孔を有する。高台の有無は不明であるが、同住居出土高杯（157・158）と共に外来系土器と考えられる。

⑤蓋 顶部が凹み、先端はハの字に開くものである。器形により、同期に一般的に見られる（174・175）のものと、つまみ部が肥大して先端の広がりが短径のもの（180）の、二形態に分類される。つまみ部（蒸氣孔）あるいは先端部に緊縛用に穿孔されるものではなく、また赤彩されたものも見られない。

⑥瓶 全形が明瞭なものは2点（172・176）のみである。いずれも体部が直線的に外開して、逆台形状を呈すものであり、底部に一孔を穿つ。文様の加飾及び赤彩の施されるものはない。器面調整は、箇状工具によるナデ調整の他、外面のみ、あるいは内外面ともに磨きが施されるものも存在する。

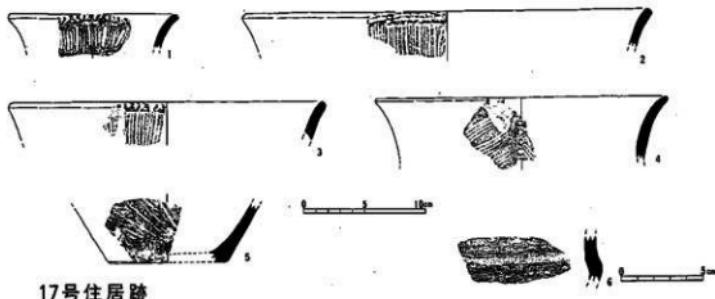
第2次調査（昭和48年）の折、3号住居址より瓶が出土したとされるが、詳細は不明であるが、どうも焼成前に妻に穿孔を施したものようである。

各器種については以上であるが、次に胎土に関して付言しておきたい。各地域の箱清水式土器を実見すると、胎土中に含有する砂粒の量の差が著しいことに気付く。すなわち千曲川水系に含有の比率は少なく、当遺跡を含んだ北安量一帯には多量に混入させる傾向がある。調訪地方などは、器種によって相違があるようである。同期の北陸地方の土器には、胎土に多量の砂粒を混入する傾向が見られるが、素地を作る成作段階に、そこからの影響があったのか、今後の課題である。

箱清水式土器文化圏内的一小地域の指標遺跡と考えることのできる古城遺跡の様相は、1・4・5段階といずれも、在地で生産されたもの他に、他地域からの客体土器あるいは、影響を受けたものが少なからず見受けられ、一定の地域的個性を持つつも、他の地域に排他的ではない交流の仕方、また時代背景が土器を通じて想起されるところである。

古城遺跡出土弥生土器の特徴について総合述べてきたが、現段階ではまだ当遺跡の出土土器総てに渡り、図化し資料化されたものではなく、早急に図面化し、出土土器群の形態分類及び構成、また他地域との対応あるいは交流関係等を明らかにしていかなければならないと考えている。

35号住居跡



17号住居跡

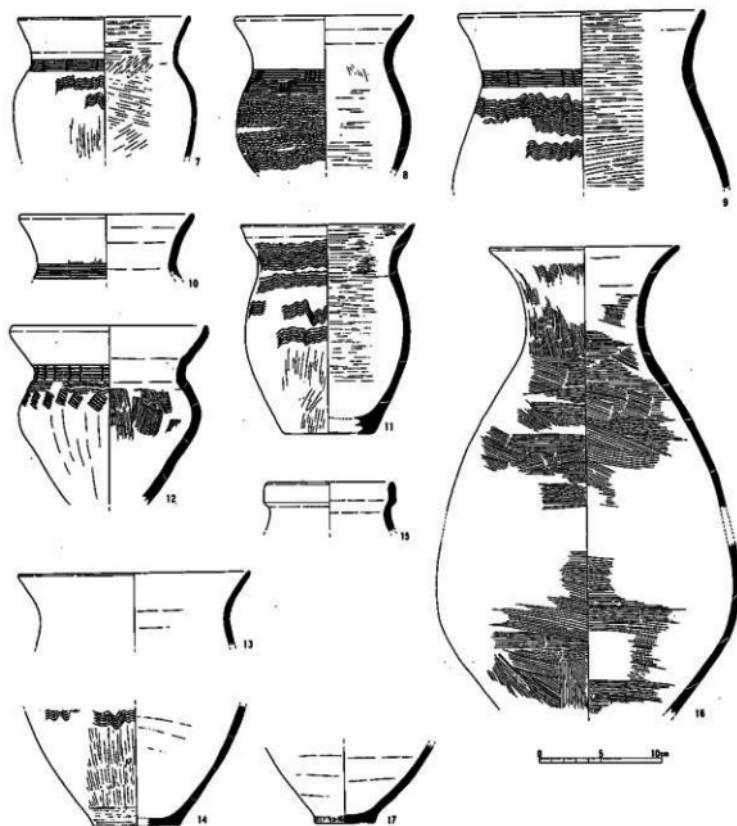
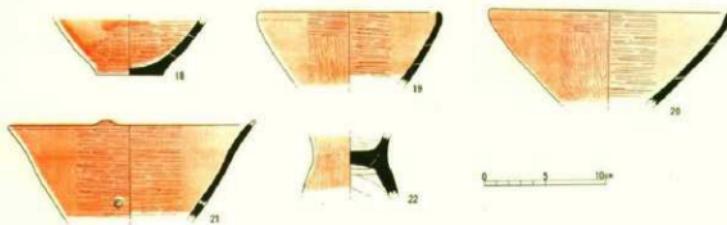
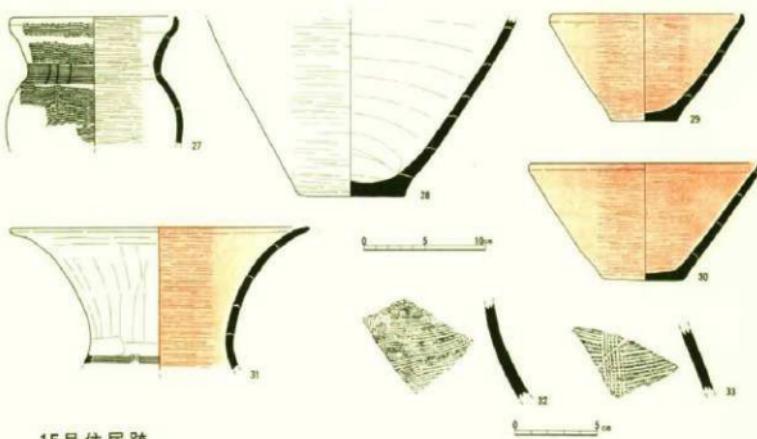


図29 弥生時代中期前半・後期土器(1) (6は1:3、それ以外は1:4)



14号住居跡



15号住居跡

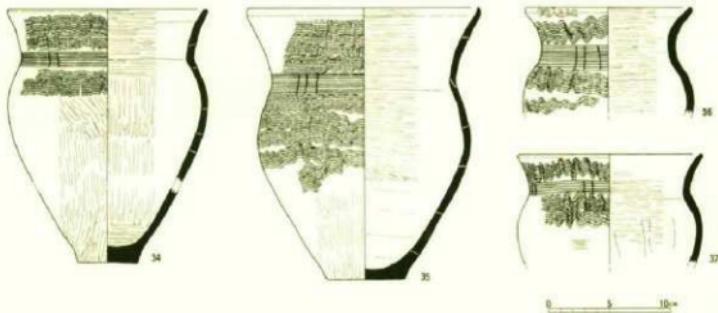


図30 弥生時代後期土器（2）（23～26・32～33は1：3、それ以外は1：4）

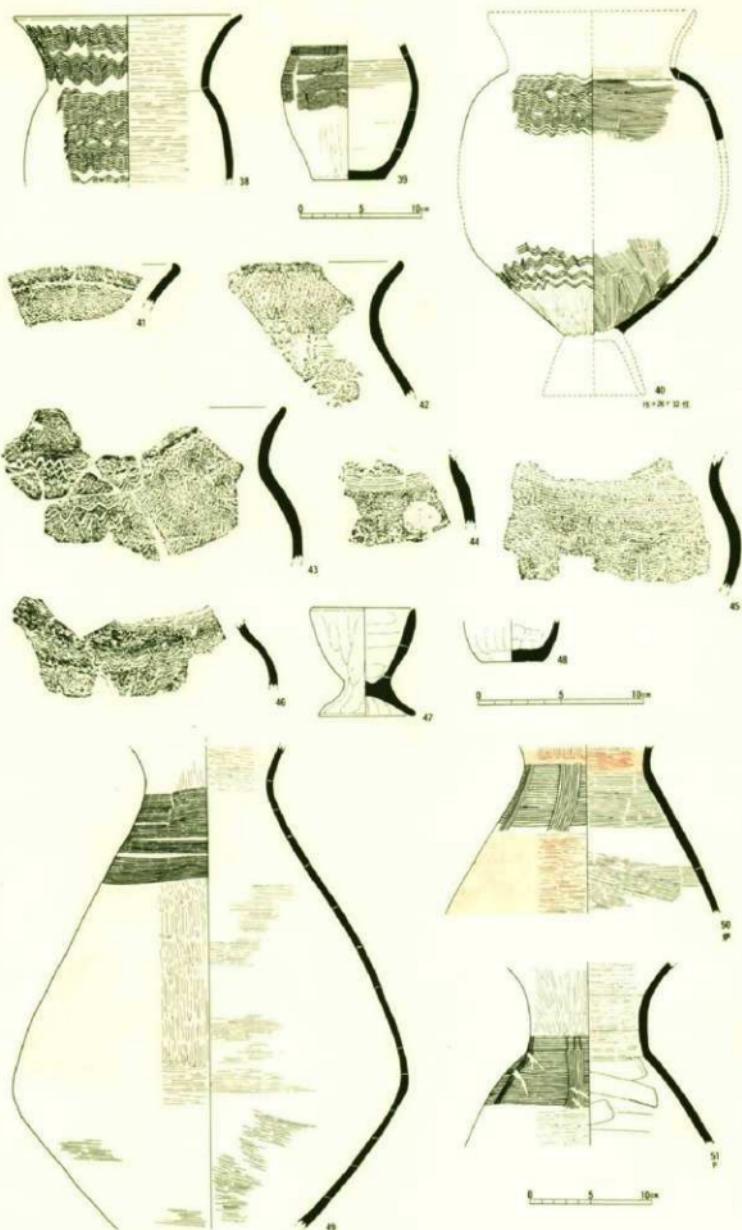


図31 弥生時代後期土器（3）（41～48は1：3、それ以外は1：4）

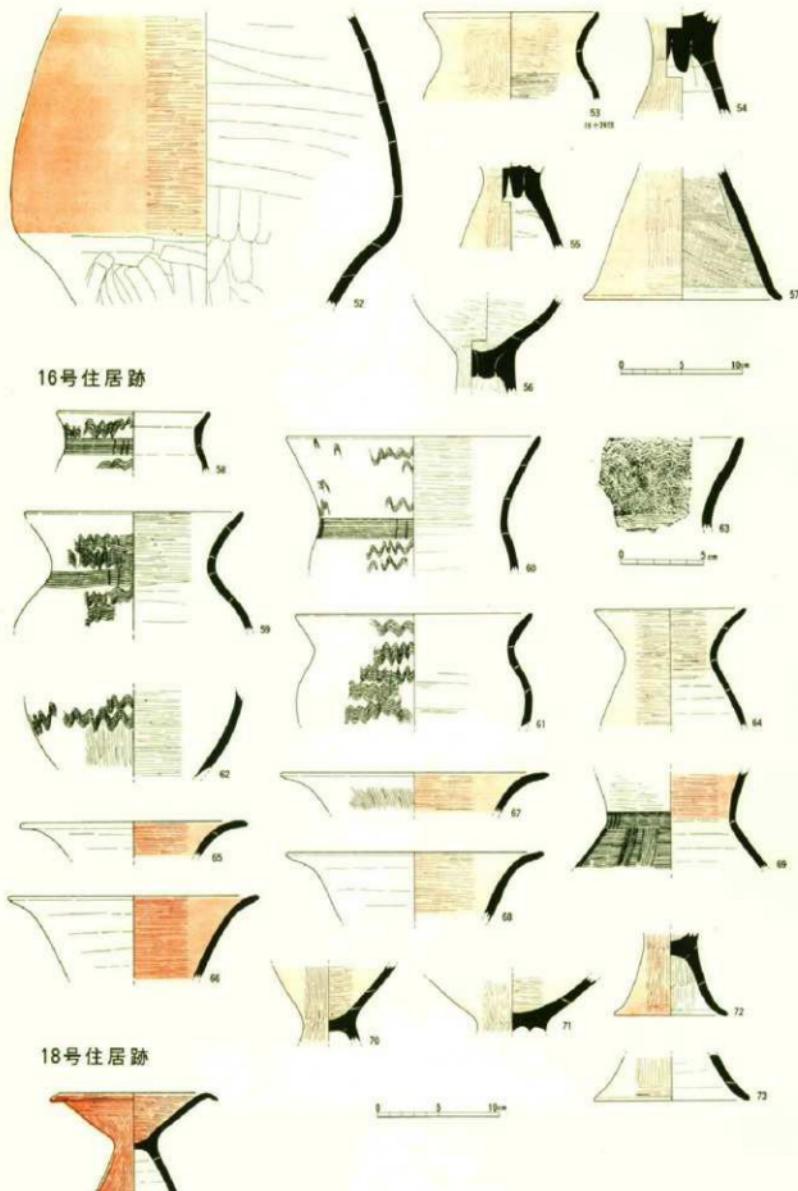


図32 弘生時代後期土器(4) (63は1:3、それ以外は1:4)

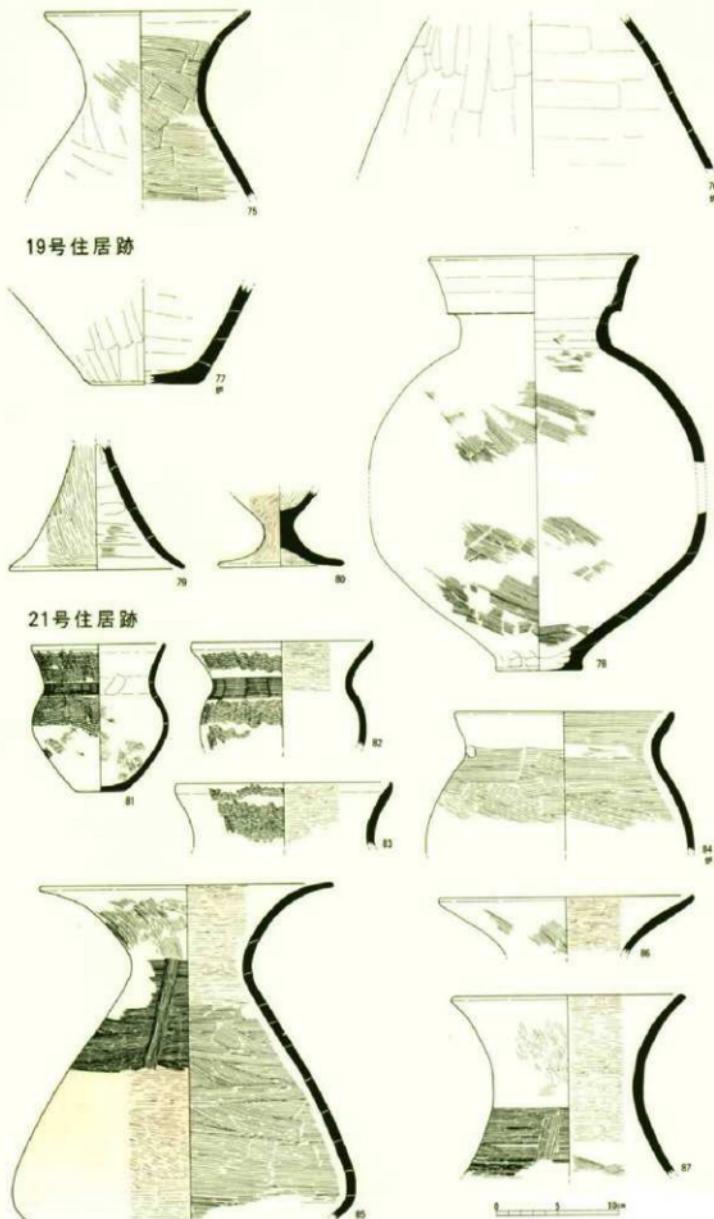


図33 弥生時代後期土器（5）（1:4）

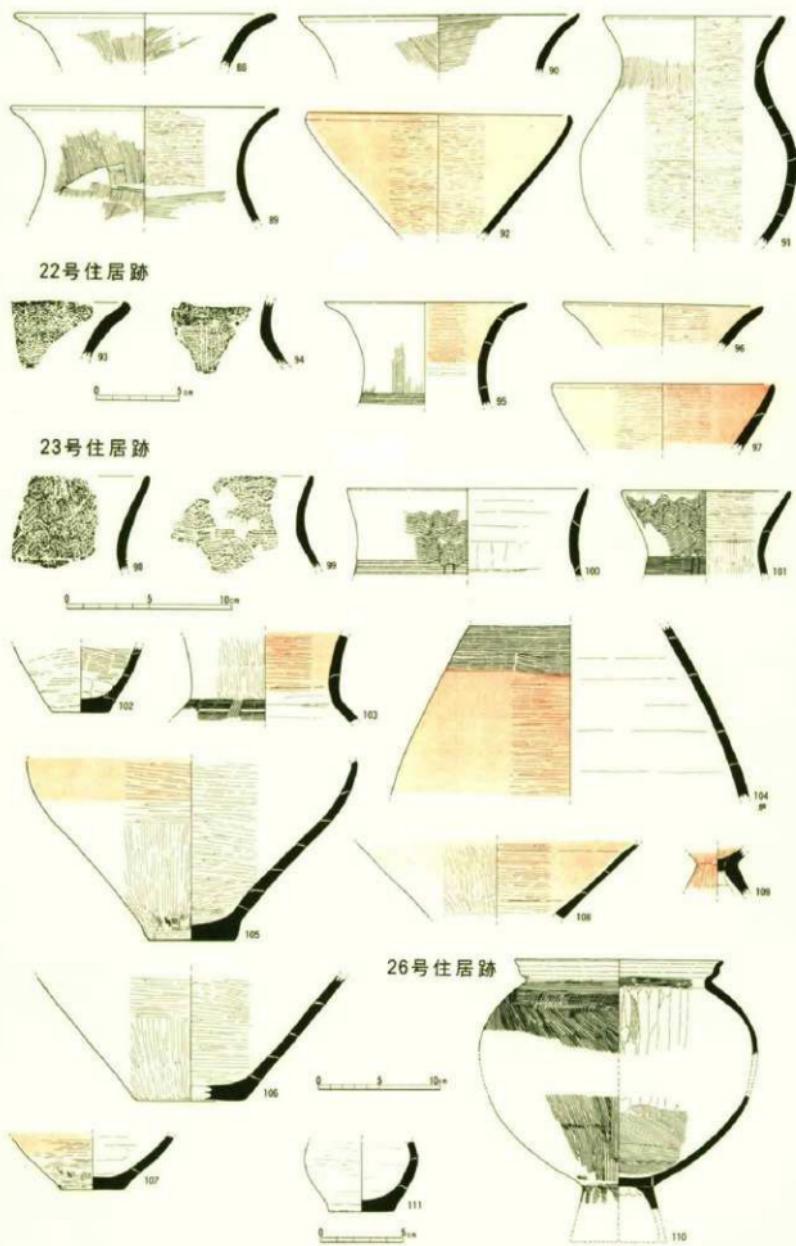
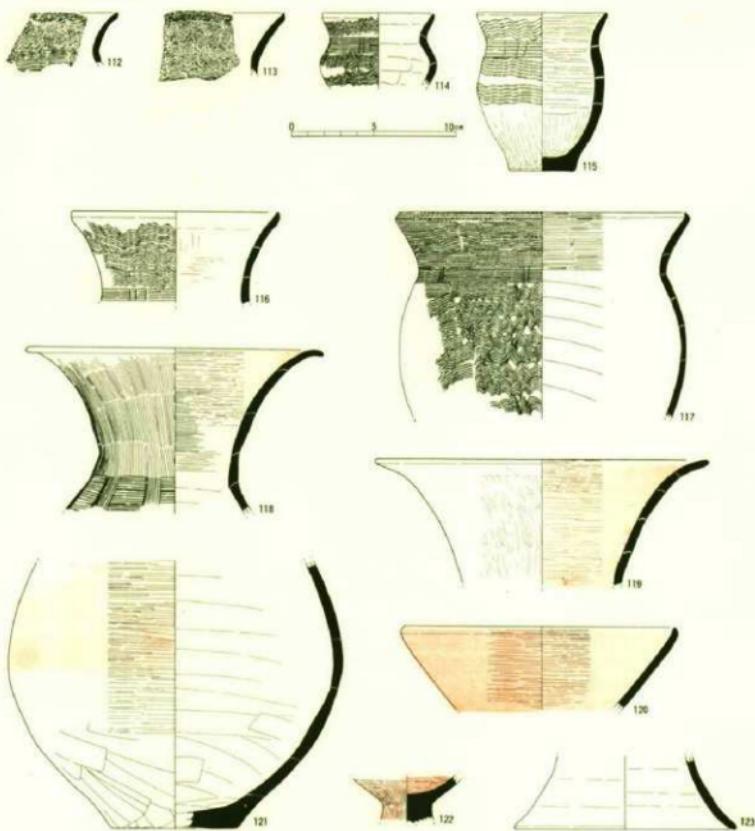


図34 弥生時代後期土器（6）（93・94・98・99・111は1:3、それ以外は1:4）

30号住居跡



31号住居跡

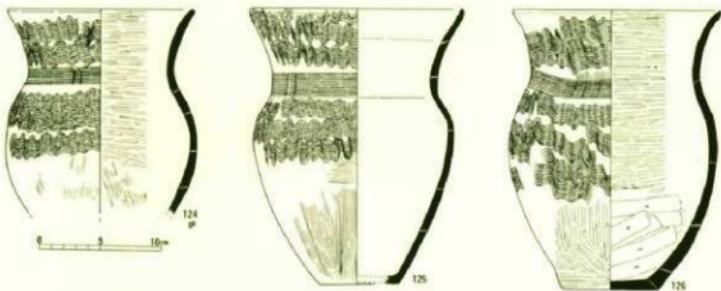


図35 弥生時代後期土器（7）（112～115は1:3、それ以外は1:4）

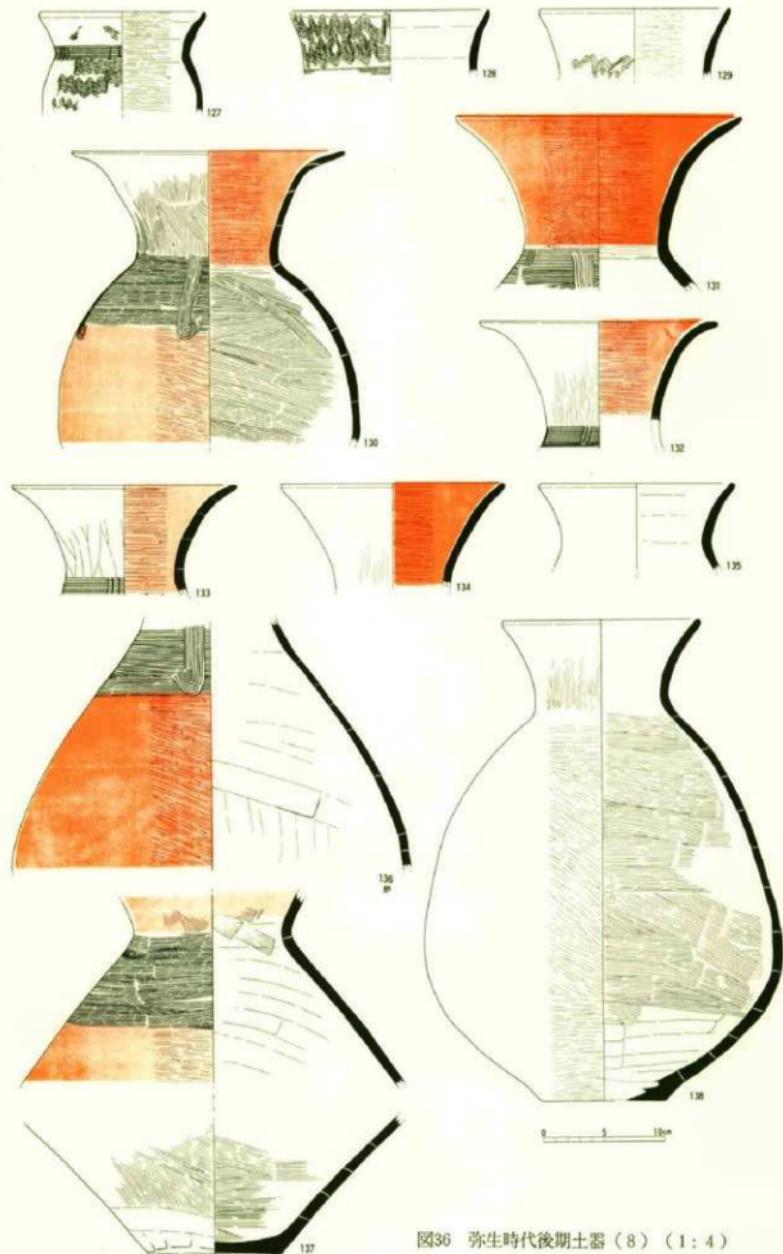
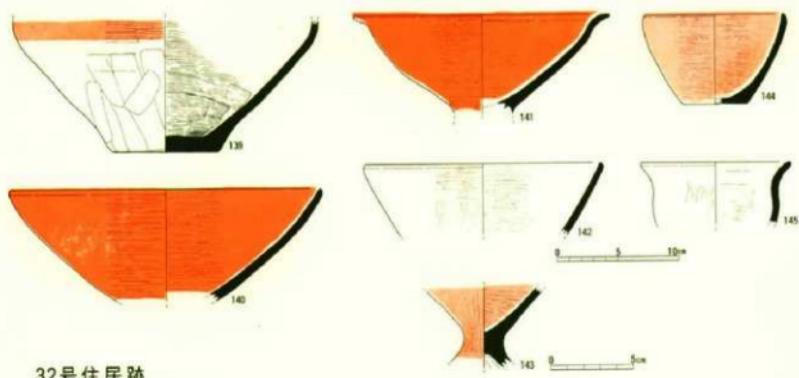


図36 弥生時代後期土器（8）（1:4）



32号住居跡

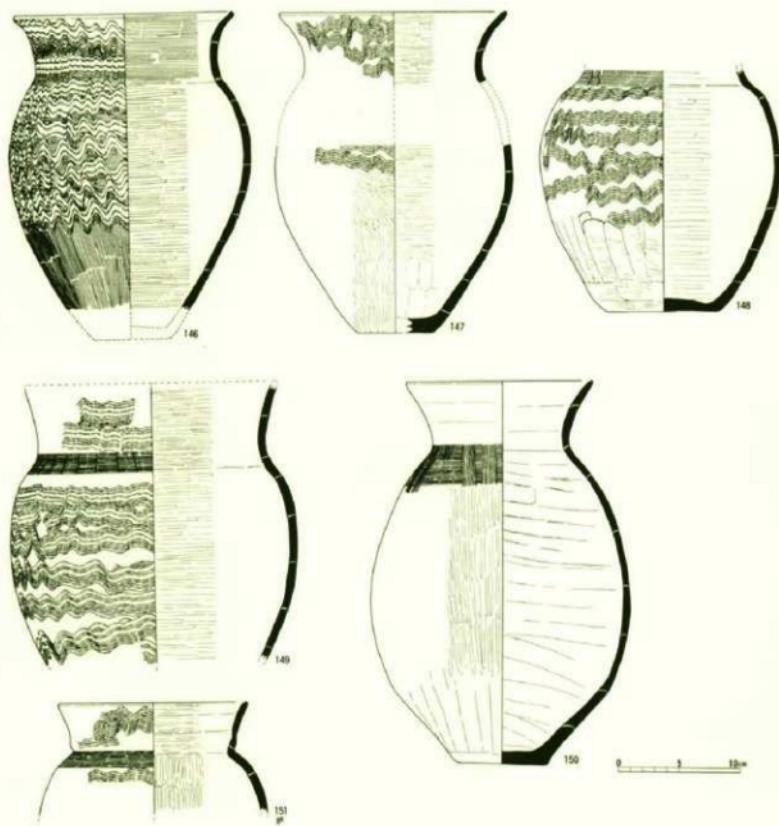


図37 弥生時代後期土器（9）（143は1:3、それ以外は1:4）

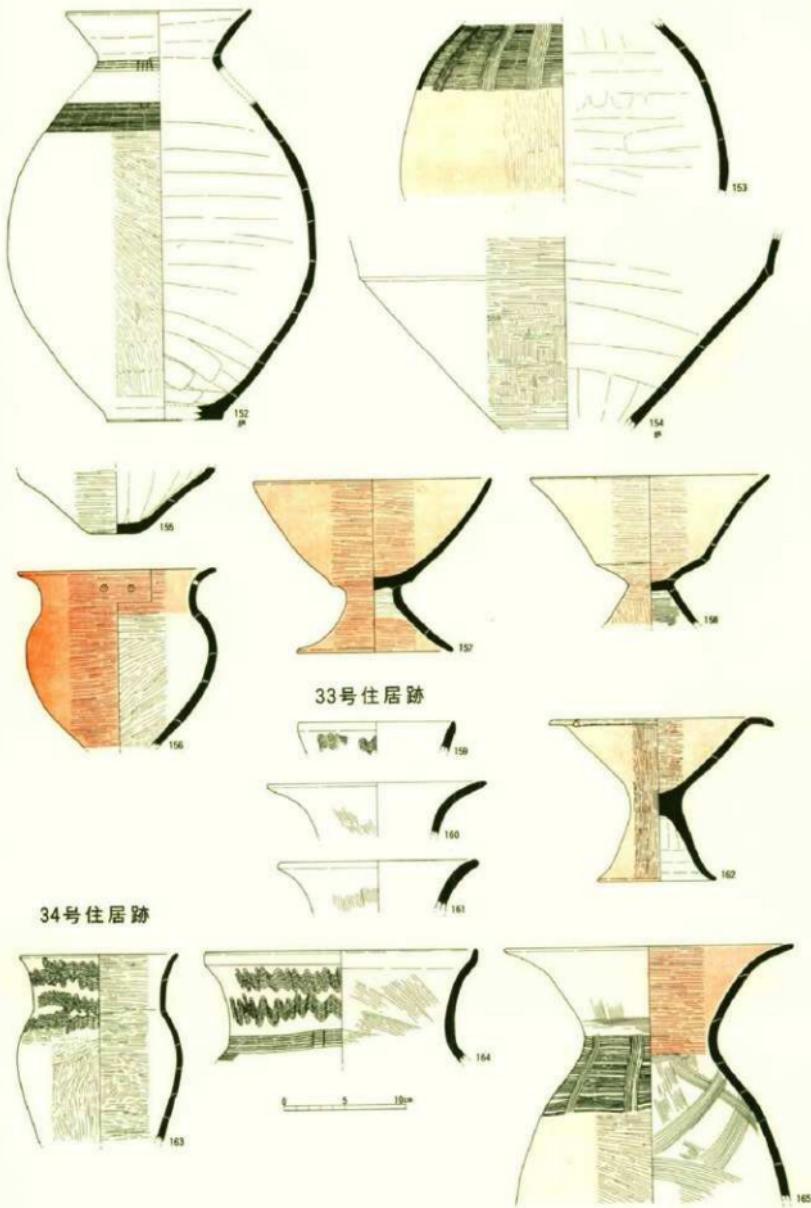
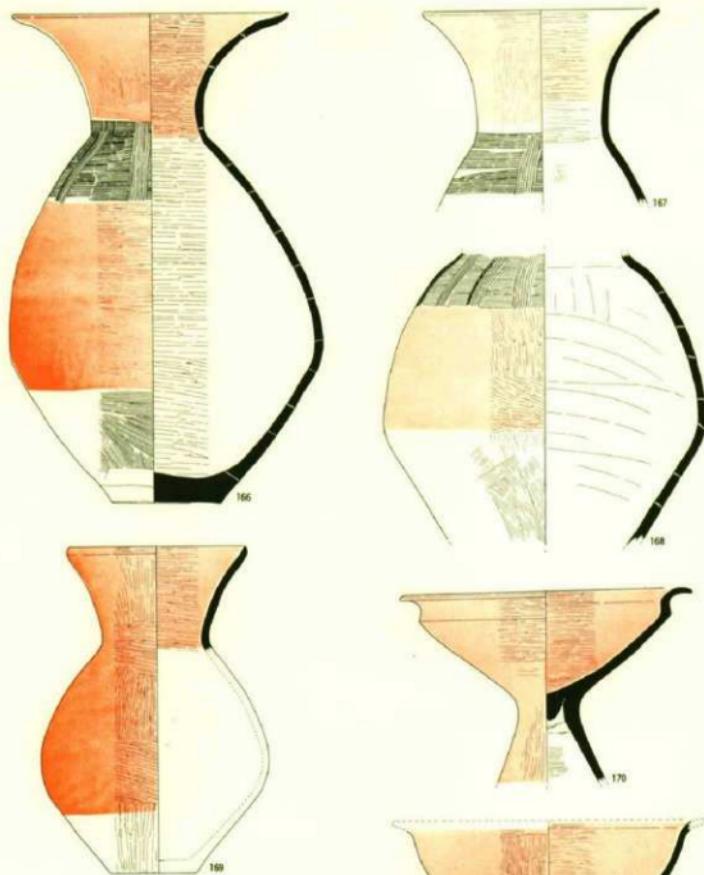


図38 弥生時代後期土器(10) (1:4)



4号住居跡

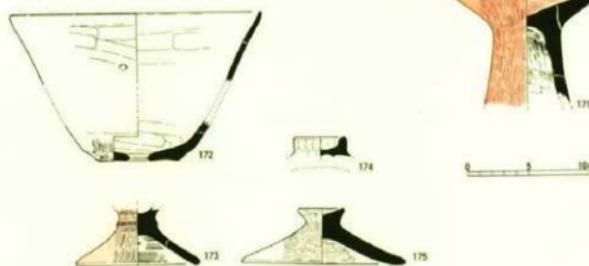
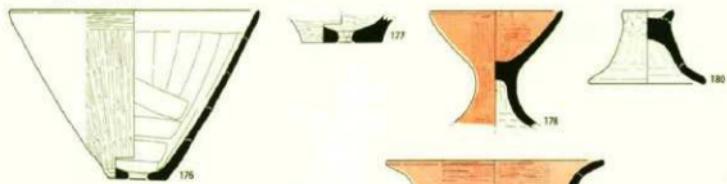
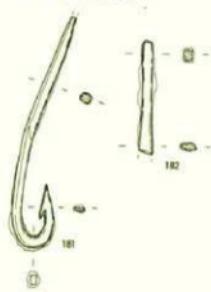


図39 弥生時代後期土器 (11) (1:4)

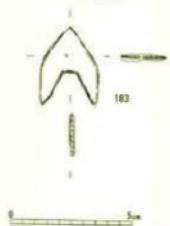
27号住居跡



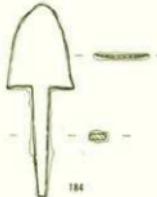
4号住居跡



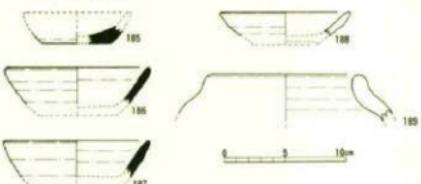
7号住居跡



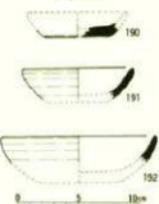
古墳周溝



中世 III区



IV区



IV区 竪穴

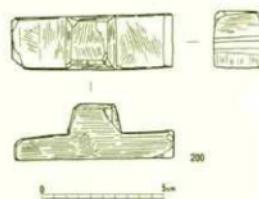
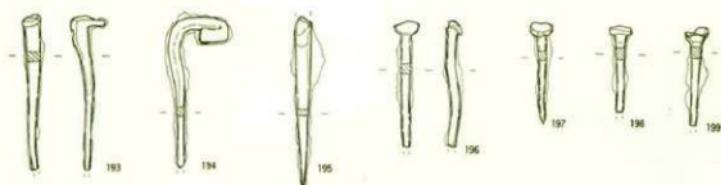


図40 弥生時代後期土器（12）（176～180、1：4）、
弥生時代後期鉄製品（181～183、1：2）、
古墳時代鉄製品（184、1：2）、中世土器・陶磁器
(185～192、1：4) <185～187・190～192は土器
188は16C東海系陶器、189は瓦質陶器。>、
中世鉄製品・石製品（193～200、1：2）<鉄製品はす
べて和釘、200は凸状滑石製品。>

第 IV 章 結語

大町市の市街地東方から、明科町の押野まで続く段丘の北の端に古城遺跡は立地している。この段丘上は遺跡の分布が濃密なところであるが、とりわけこの遺跡のある松崎集落と南の館の内、その東の常光寺木舟、さらには南の丹生子集落にかけては、弥生時代から中世にいたる大遺跡地帯であることが早くから知られている。先年の館の内県営住宅敷地内の調査と古町遺跡、今回の古城遺跡の調査で、この地域が大町市の歴史にとってたいへん重要な所であると、認識を新たにした次第である。

古城遺跡の調査区域は、送電鉄塔の敷地その他の狭い範囲で、しかも区域はバラバラに散在しているのだが、検出された弥生時代中、後期の堅穴住居跡は切り合って計29軒、それに方形周溝墓の一部らしい溝や古墳、土塁、中世の居館の施設まで及んでいる。弥生時代の堅穴住居跡は、そのほとんどがこの地方の特色といつてもよい埋甕炉や、石囲いの埋甕炉をそなえているのが印象的であったし、たくさん出土した土器はこの地方の弥生式土器の標準となりうるものであろう。もしこの遺跡を全面調査したならば、どのようなものが現れるか、ちょっと想像のつきかねるところがある。

古城遺跡のあるところは、段丘上でも少し高いところで、遺跡の東から南にかけてはやや低湿なところであるし、段丘の下には農具川が流れていって、その流域も低湿地であり、花見の地名がある。弥生時代人が住み暮らすにはもってこいの環境であり、当時の稻作に向いた低湿地も広いのである。周辺の同時代遺跡いくつかを含めて、ちょっとした勢力圏、原初的な小さいクニらしいものの存在を考えてもいいような気がする。

古城の名のとおり、ここはまた中世の土臺の居館跡である。南方の館の内集落のあるところが仁科氏の居館のあったところであるが、東北方の丑館とともにここは北方に備えての構えであったのかかも知れない。そんなことでこの館は仁科氏自身の別館として使われていたのか、親戚や被官の居館としても重い立場にあった人物の居館であったろう。いま地表に見られるのは東北隅の土居ばかりであるが、もとは四方に土居と堀をめぐらし、門や椎などもある威儀ある構えであったことは想像に難くない。

発掘調査は上記のように狭い範囲のものだったので、居館の全貌を把握するというわけにはいかなかったが、それでも南と北の端の土居の痕跡や、南の土居外にあった堀のあと、使用目的はわからぬながら、居館付属の建物跡とみられる柱穴群や堅穴、遺物が検出されている。

遺物の年代によれば13世紀から16世紀にわたっているから、鎌倉時代の初めから戦国時代末まで使用されたことが知られる。特に古城と呼ばれるのもそこに理由があるのであろう。仁科氏の館の内居館の初まりを10世紀頃と考えたいが、古城居館はそれから後に構えられ、仁科氏がいまの大町の地に移ってしまってから後にも、おそらく仁科氏滅亡に近い頃まで使用され続けていたと考えてよい。

それにしても居館構築の折、おそらく地下から出土したであろう弥生式土器を見て、当時の人たちはどのように思ったことであろう。

末尾ながら発掘調査に当った方々の御苦労に対して、厚い敬意と感謝を捧げるものである。

(団長・篠崎健一郎)

1. 遠景（南東より。中央の木・鉄塔のある周辺。）



1

2. 遠景（東より）



2

3. 全景（南東上空より。
大町東小学校10周年
記念写真より複写。）



3

写真 2



1. 近景（北より。木のある場所が北西側に残る土壘。）



2. 近景（I 区より II ～ IV 区を望む。後方の鉄塔手前が III 区、前方の鉄塔が IV 区、中央やや左が II 区。）



3. IV 区近景（I 区より望む。脚立の置いてある土手の段が、土壘で、その手前には堀があることが確認される。）

1. I 区全景

(上空より。古墳・8・
9・10号住居跡等。)



2. II 区全景

(南西より、4～7・
11～13号住居跡、中
世柱穴群など。)



写真 4



1. II区全景（北より）



2. III区北側全景
(南より。15・18・30～
35号住居跡など。)



3. III区北側全景
(南東より)

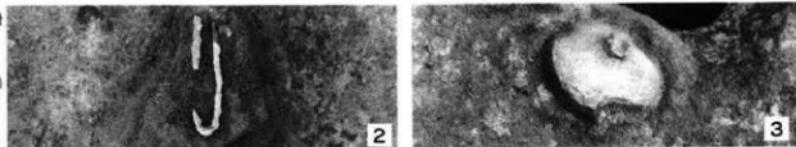
II区

1. 4号住居跡
遺物出土状況
(北より。中央が炉である。)



1

2. 4号住居跡鉄製釣針等出土状況



2

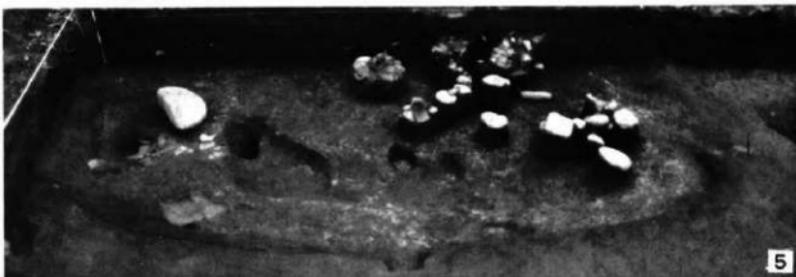
3

3. 4号住居跡土器(蓋)出土状況



4

5. 5号住居跡遺物出土状況(東より。多くの土器が床面より約5~10cm浮いた状態で出土)



5

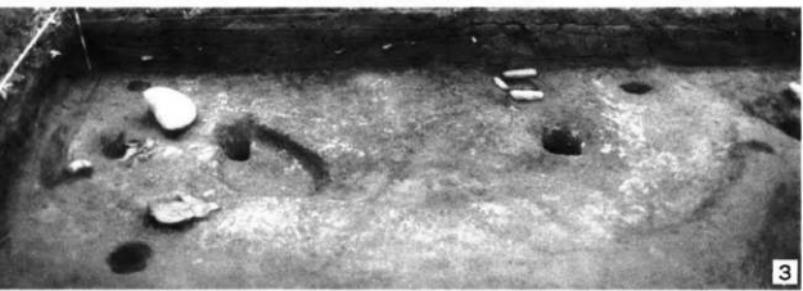
写真 6



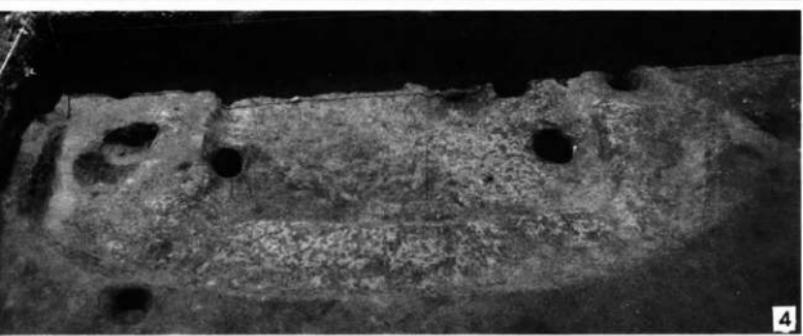
1



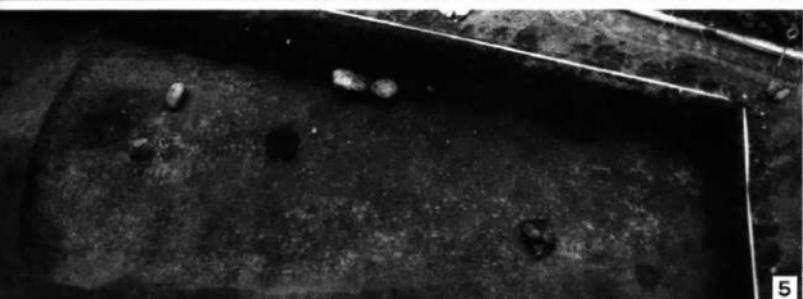
2



3



4



5

Ⅱ区

1. 5号住居跡土器
出土状況
2. 5号住居跡戸口. 5
(ピット内に土器(壺)
が貼りついたような
状態で出土。周囲に
は粘土塊が残出され
る。おそらくは、貯
蔵穴的な用途と思わ
れる。)

3. 5号住居跡(新)全
景(東より。中央が
一段下がりベッド
状構造になる。また、
中央は貼床されてお
り、その下層から旧
5号住居跡が残出さ
れる。炉は石囲い埋
廻炉。)

4. 5号住居跡(旧)全
景(東より。周囲が
一段高くなるベッド
状構造となりそこに
貼床して、新しい住
居としている。)

5. 7号住居跡全景
(5柱北壁を切る。東
より。)

II区

1. 6号住居跡全景
 (南より。11、12住を
 切る。南東部に土器
 の完形品が3個体
 (高杯2・甕1) が並
 んで出土した。その
 周辺には甕が2個体
 あった。主柱穴は、
 6本と思われ、片側
 の3本が検出された。
 炉は、石圓い埋甕炉
 である。)



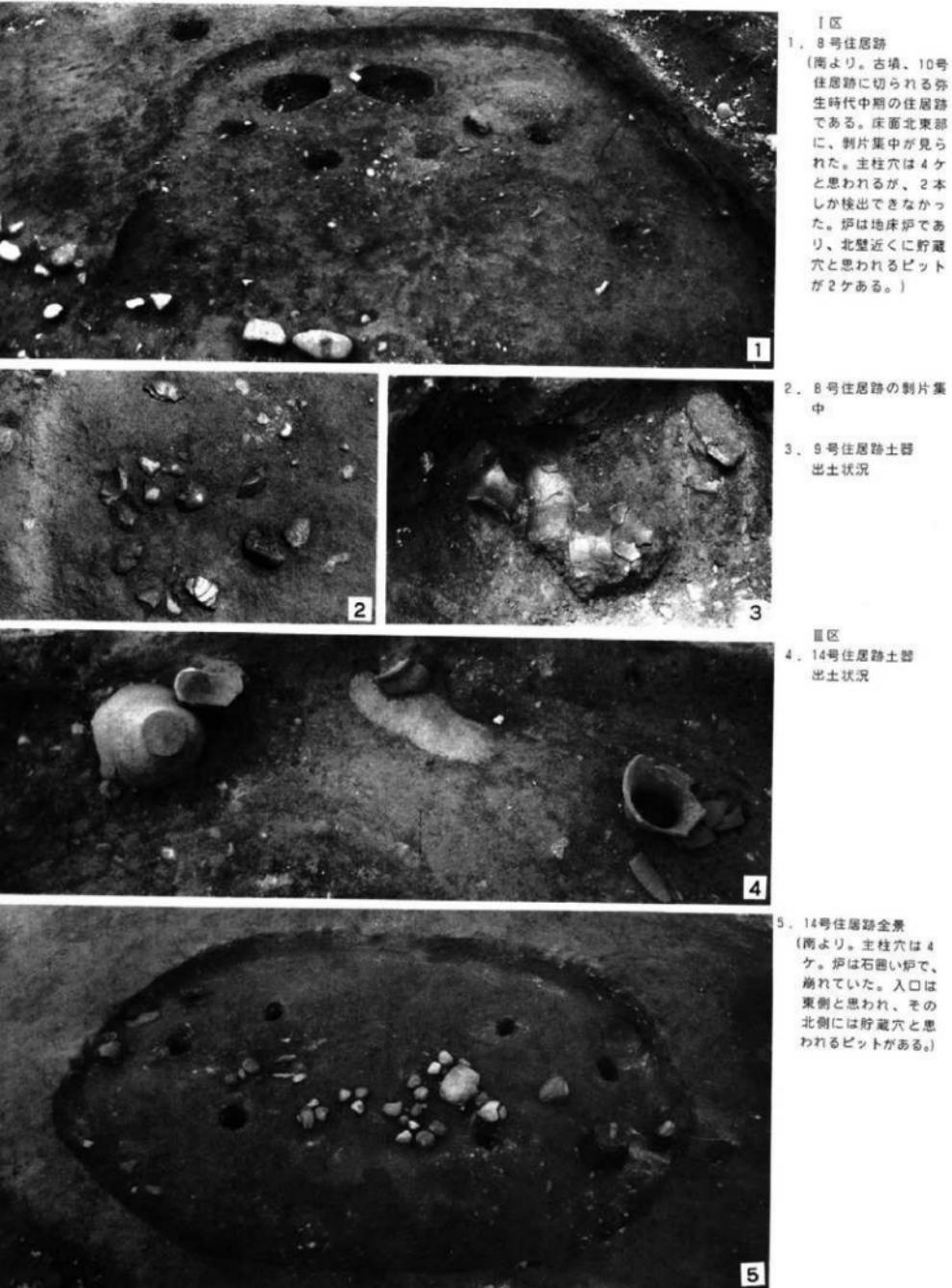
2~4. 土器出土状況



5. 12号住居跡全景
 (南より。6住を切る。
 主柱穴は4本で、炉
 は石圓い炉で1部に
 土器片を使用してい
 た。)



写真 8



Ⅲ区

1. 14号住居跡全景
(東より)



1

2. 15号住居跡
南半分突出状況 (東
より)



2

3. 15号住居跡全景
(西より。大型な住居
跡で、炉は石囲い埋
裏炉。炉の南西には
ピット内に壺が入れ
られた状態で出土。)



3

写真10



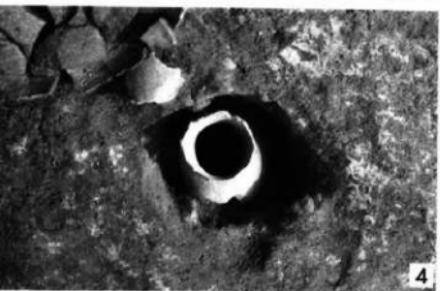
1



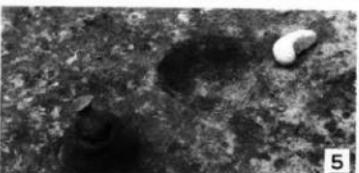
2



3



4



5



6

Ⅱ区

1. 15・33号住居跡
(南より。15住は17・
33住を切っている。)

2. 炉周辺遺物出土状況

3. 炉上の壺出土状況

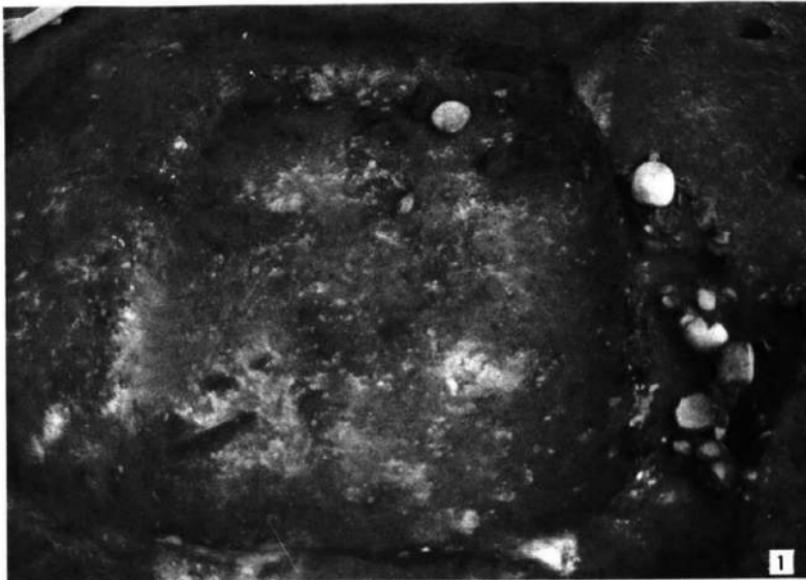
4. 炉南西ピット内壺出
出土状況

5. 小型台付鉢、勾玉状
石器出土状況

6. 16・26号住居跡全景
(西より。26住は16
住を掘り込んでいる。
26住は焼失家屋で炭
化材が多く出土。16
住は17住を切ってい
る。18住の東壁沿い
には土器が集中して
出土。)

Ⅲ区

1. 15・26号住居跡全景
(南より。26号の主柱
は4本で、炉は掘り
方のみ突出された。
炉の北西には換土が
見られた。)



1

2. 16号住居跡土器
出土状況



2

3. 26号住居跡土器出土
状況 (東海系S字口
縁台付壁)



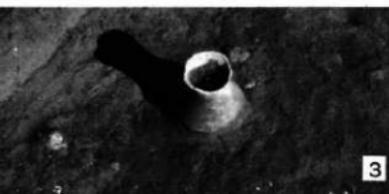
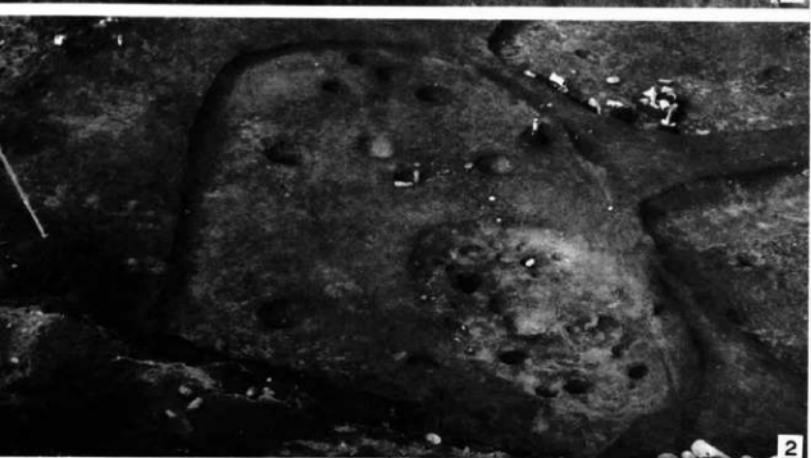
3

4. 17号住居跡 (北西よ
り。15・16号に切ら
れる。炉は2ヶ所に
あり、石圓炉と換土
のみのものがあった。
主柱穴は4本柱であっ
たと思われる。)



4

写真12



Ⅲ区
1. 17号住居跡
(南西より)

2・3. 18・35号住居跡
(18住は35住を切り、34号住居跡に切られる。戸は2ヶ所にあり、石囲い埋甕炉と掘り方のみ残ったもの。主柱穴は4本柱穴である。)

2. (南より)

3. (西より)

4・5. 18号住居跡土器
出土状況

III区

1. 18号住居跡
南壁側（南より）



1

2. 21号住居跡

磚、遺物出土状況
(東より)。4ヶの主柱
穴で、炉は1ヶの石
が附属する埋甕炉で
あった。炉上へ西側
と炉の北西には、礫
の集石が見られた。)



2

3. 21号住居跡
(北より)4. 21号住居跡
集石内土器出土状況5. 21号住居跡
集石

4

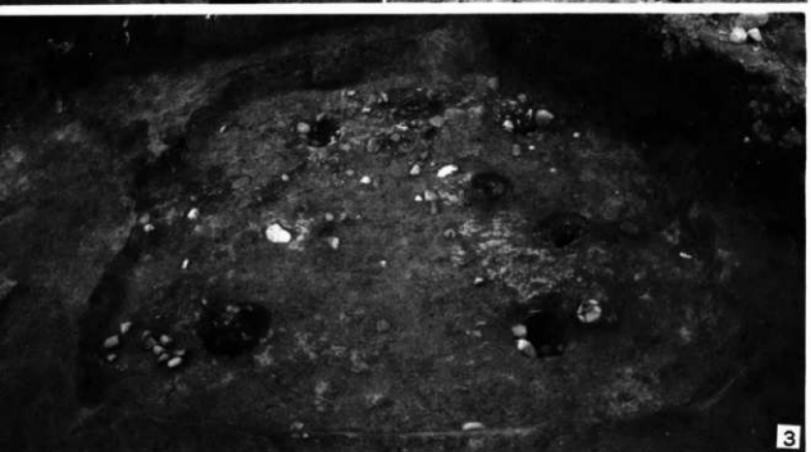


5

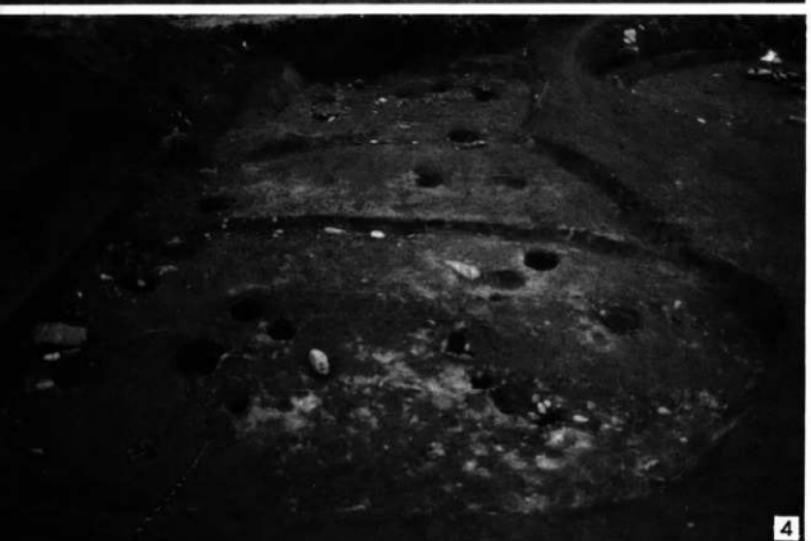


Ⅲ区
1・2. 21号住居跡
炉上～西側にかけての集石

1. (北より)
2. (東より。最も手前の2つに折れた石は、
炉石である。)



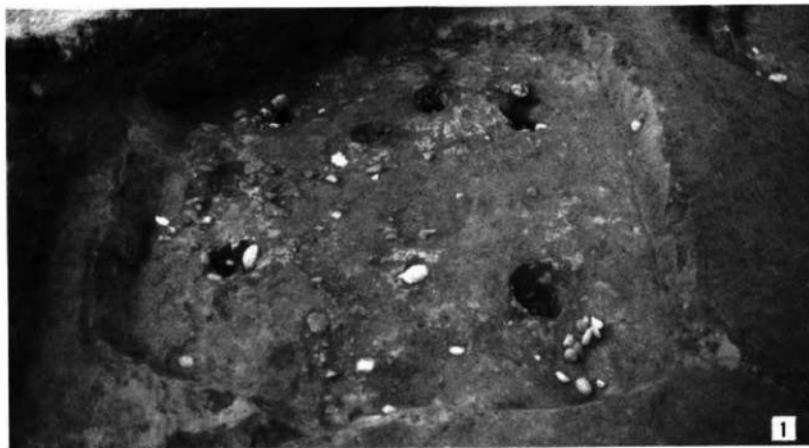
3. 19号住居跡
(北より。4本主柱で、
炉は掘り方と土器が
残っているだけであ
るが石圓いのあった
可能性もある。北東隅
には、礪み地用石
疊と思われる様が見
られた。)



4. 19・20・23号住居跡
(東より。19住と23住
は20住を切る。23住
は新旧2回の建て直
しを行っている。)

III区

1. 19号住居跡
(東より)



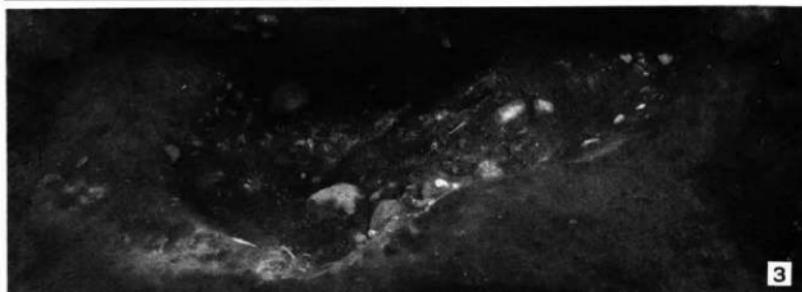
2. 23号住居跡

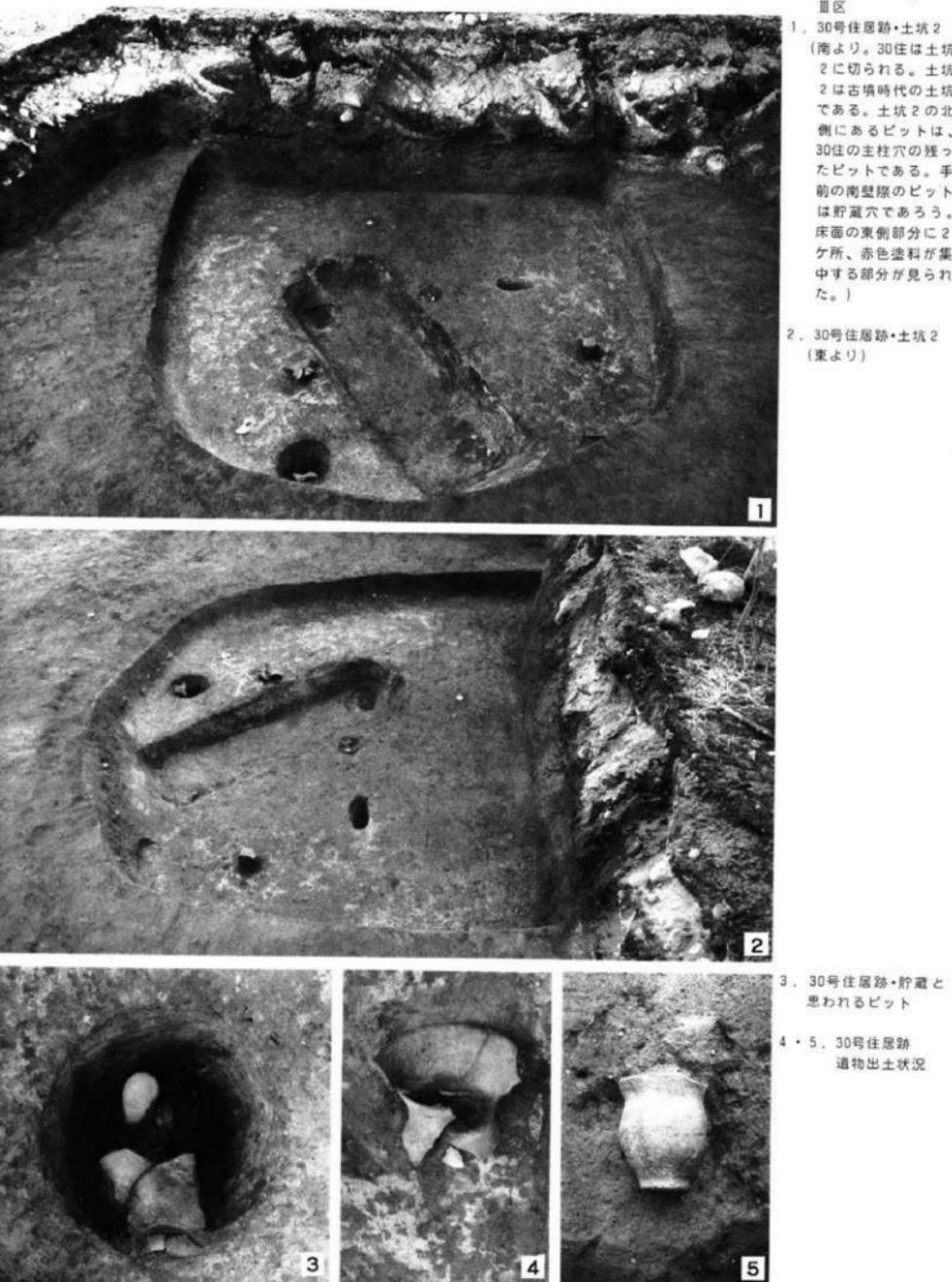
(埋甕炉と粘床された石圓炉の2ヶの炉があり、住居の形も北東壁にやや張り出す部分が見られ、2回の建て直しが考えられる。)



3. 22号住居跡・土坑1

(北より)。22住は土坑1に切られる。土坑1は中世の土坑。)





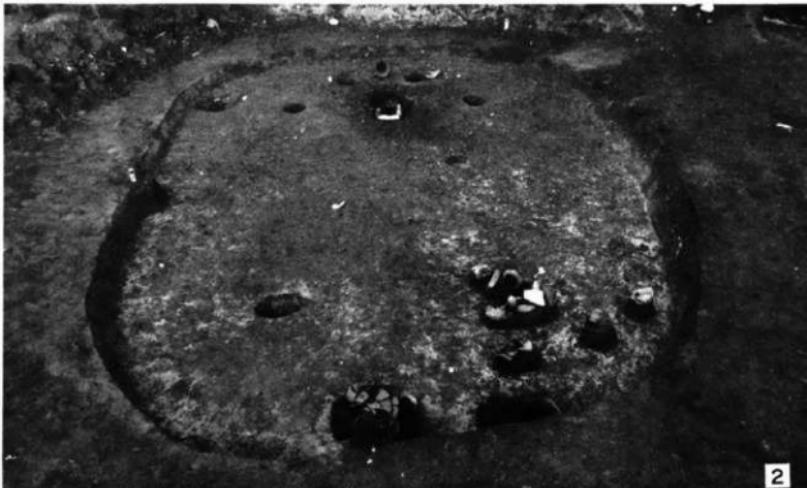
Ⅲ区
31号住居跡

1. (南より)



2. (西より)

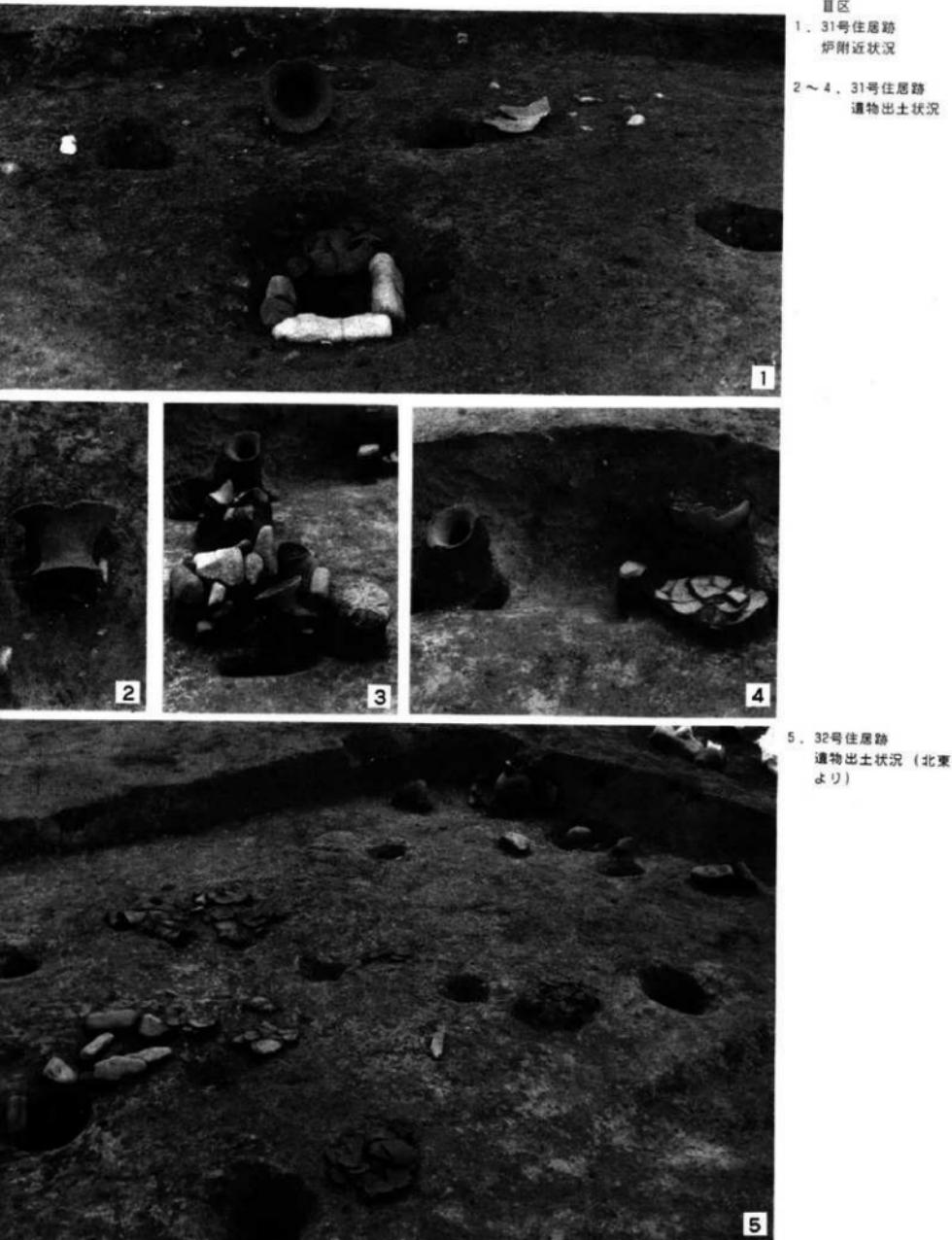
(4本主柱穴の住居で、
炉は石囲い埋甕炉である。西側が入口と
思われ、入口に2ヶ所、奥に1ヶ所の貯
藏穴と思われるピットがある。)



3. 入口と思われる附近
の遺物出土状況



写真18



III区

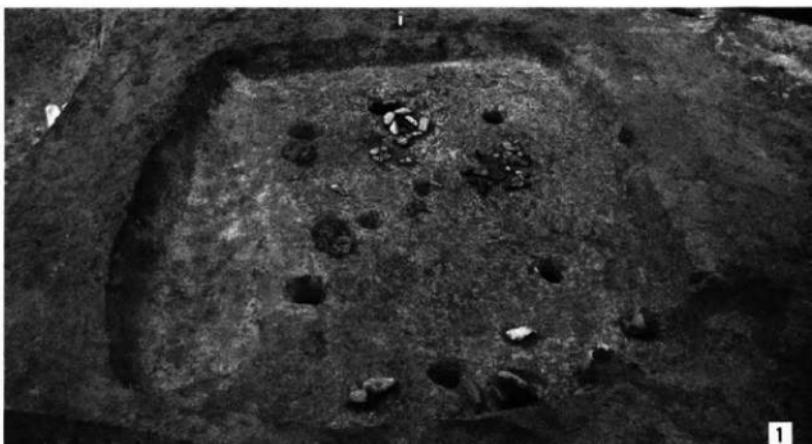
1. 31号住居跡
炉附近状況

2～4. 31号住居跡
遺物出土状況

5. 32号住居跡
遺物出土状況（北東
より）

Ⅲ区
32号住居跡

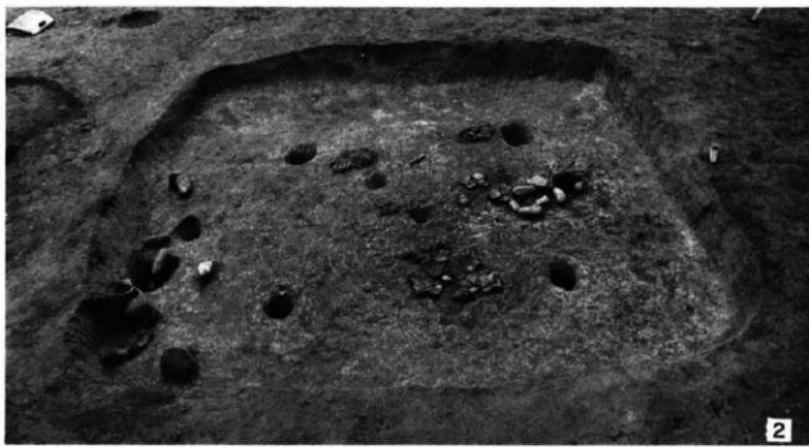
1. (西より)



1

2. (南より)

(4本の主柱穴で土器
片敷きの石塗い炉で
ある。西壁側が入口
と思われ、その南側
には、貯蔵穴と思わ
れるピットがある。
また、その南側から
は、完形の壺・高杯
が出土した。)

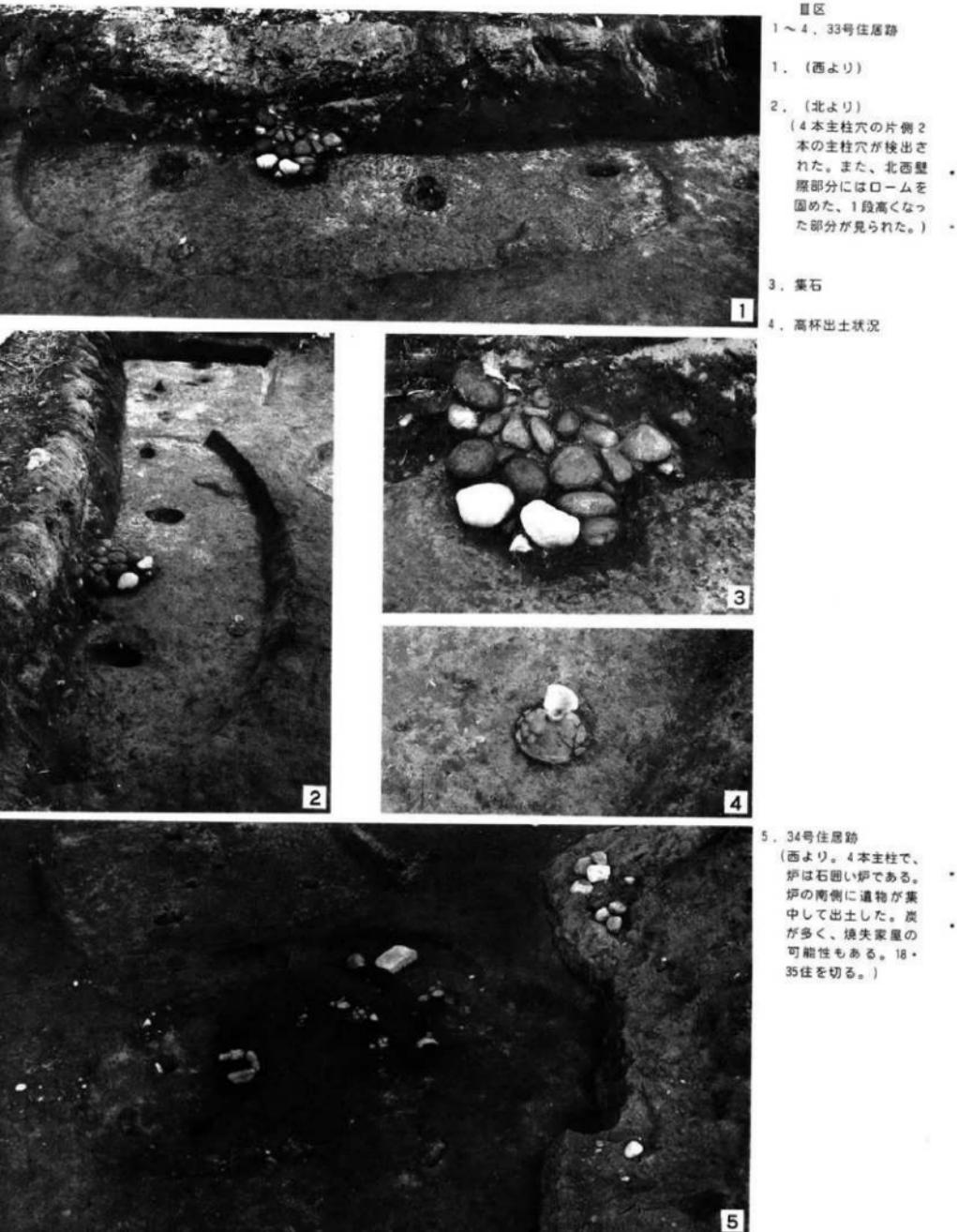


2

3. 貯蔵穴南側
遺物出土状況



3



Ⅲ区
1～4、34号住居跡

1. (南より)



1

2～4、遺物出土状況



2



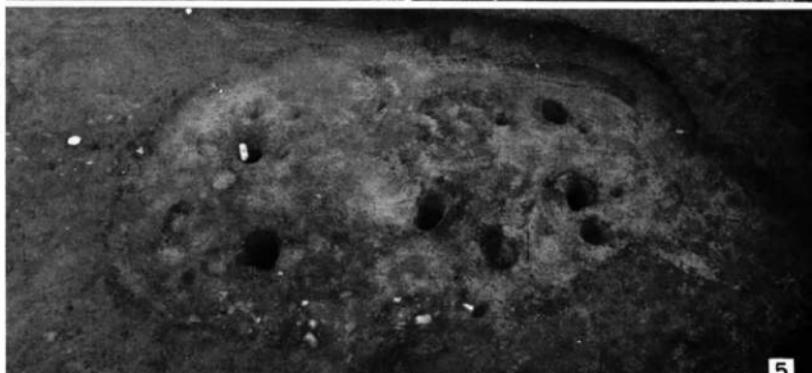
3



4

5、35号住居跡

(西より。主柱穴ははつきりとせず、炉は地床炉と思われ、焼土のみ残る。床面には多くの小ピットが見られる。)



5

写真22



IV 区

24・25号住居跡
遺物・疊出土状況

1. (南より)

2. (西より)

3・4. 土器出土状況
(24住は25住を切
る。24住内には
疊の散布が多く、
その中に遺物も
多く出土した。)

1



2



3



4

Ⅳ区

1・2. 24・25号住居跡

1. (南より)



1

2. (西より)

(4本主柱のうち3本
の柱穴が検出された。
炉は石・土器圓い、
土器片敷き石圓い炉
であった。)



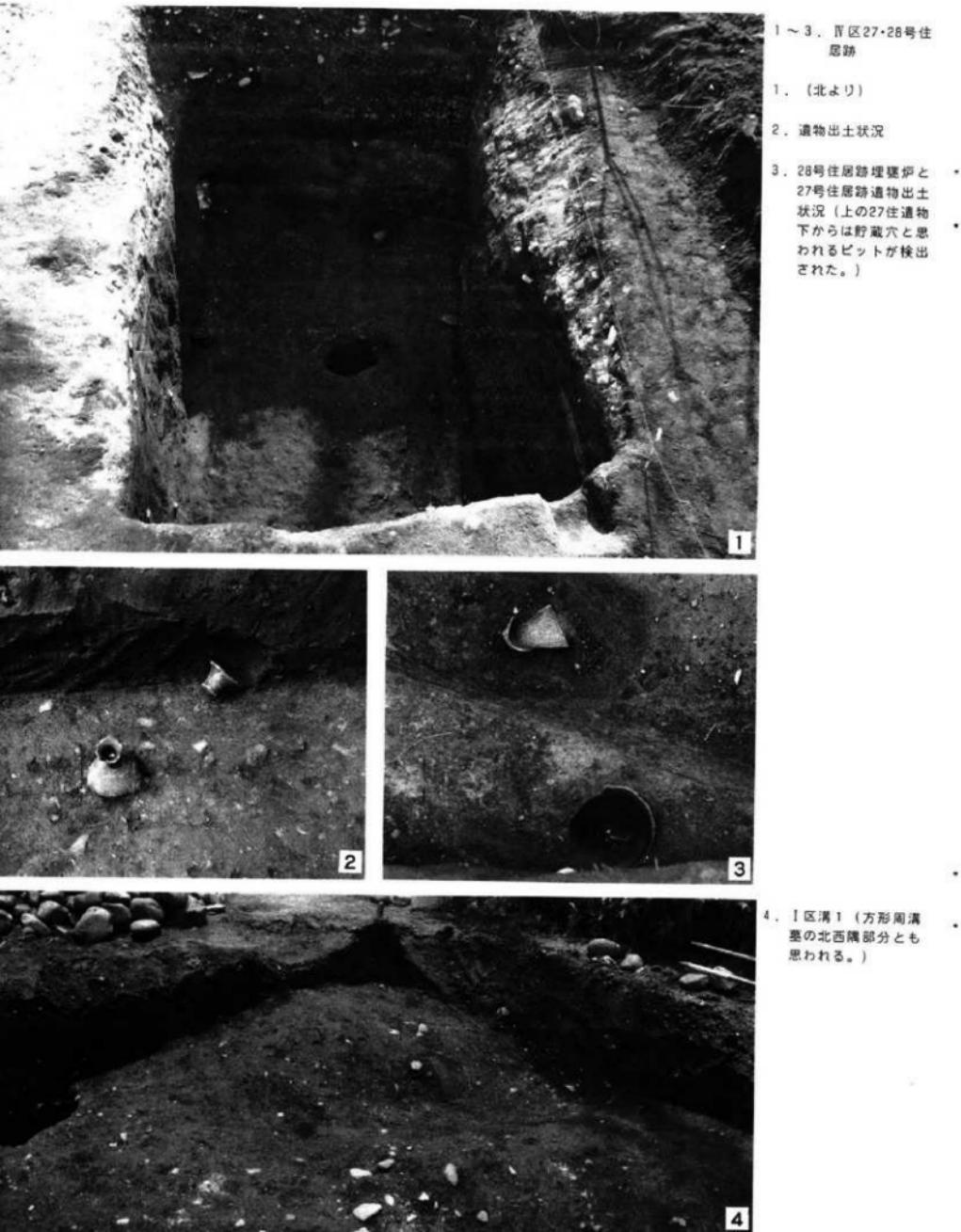
2

3. 27・28号住居跡

(西より。土壇土層下
より検出された住居
跡で、27住は28住を
切る。28住は埋甌炉
だけが検出された。)



3



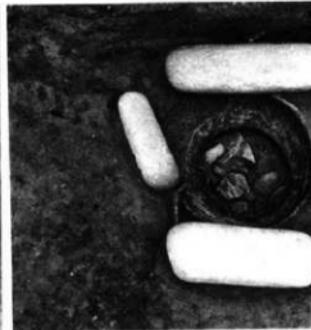
住居跡・炉

1. 4号住居跡



1

2. 5号住居跡



2

3. 6号住居跡



3

4. 12号住居跡



4

5. 14号住居跡



5

6. 15号住居跡



6

7. 17号住居跡



7

8. 18号住居跡



8